親鸞聖人繪詞傳

三

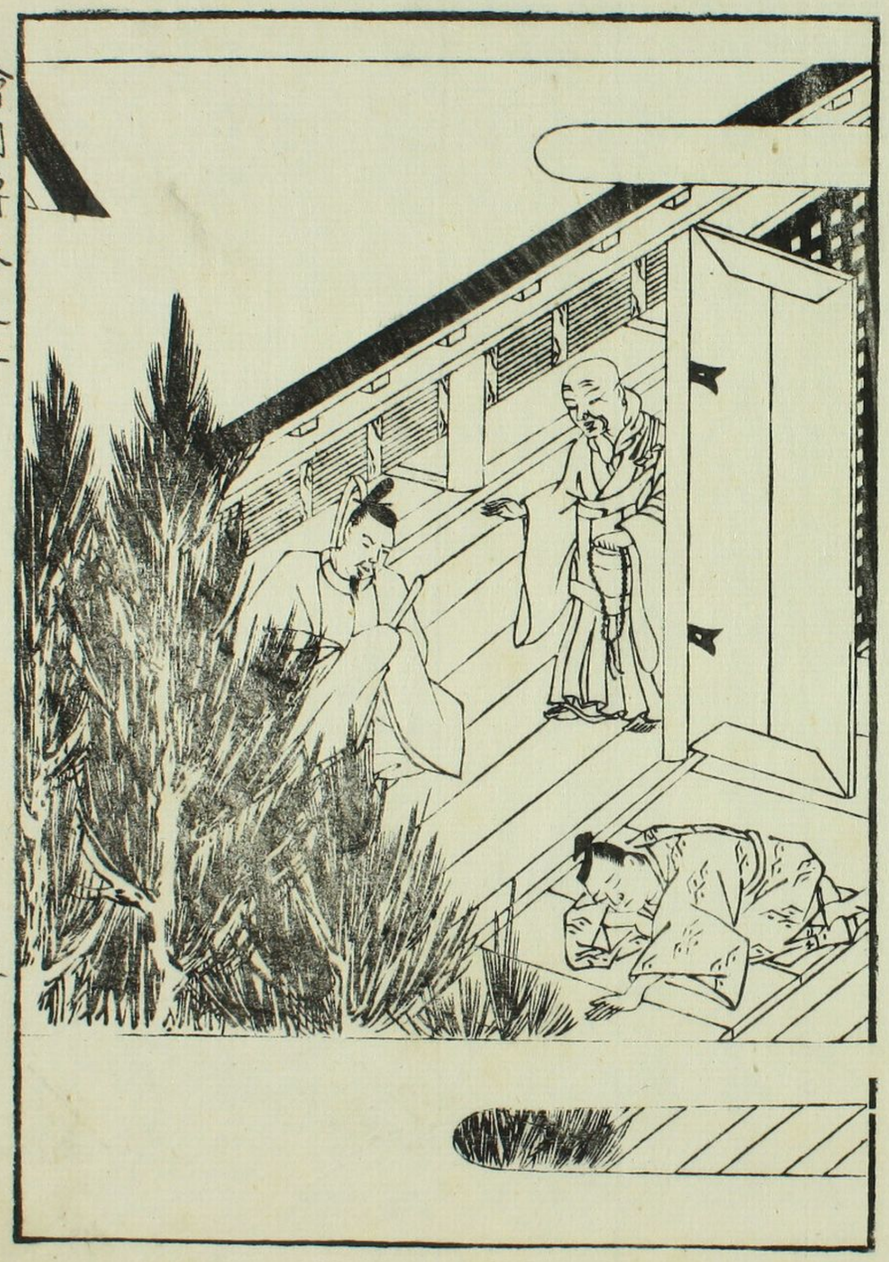
繪詞傳卷三

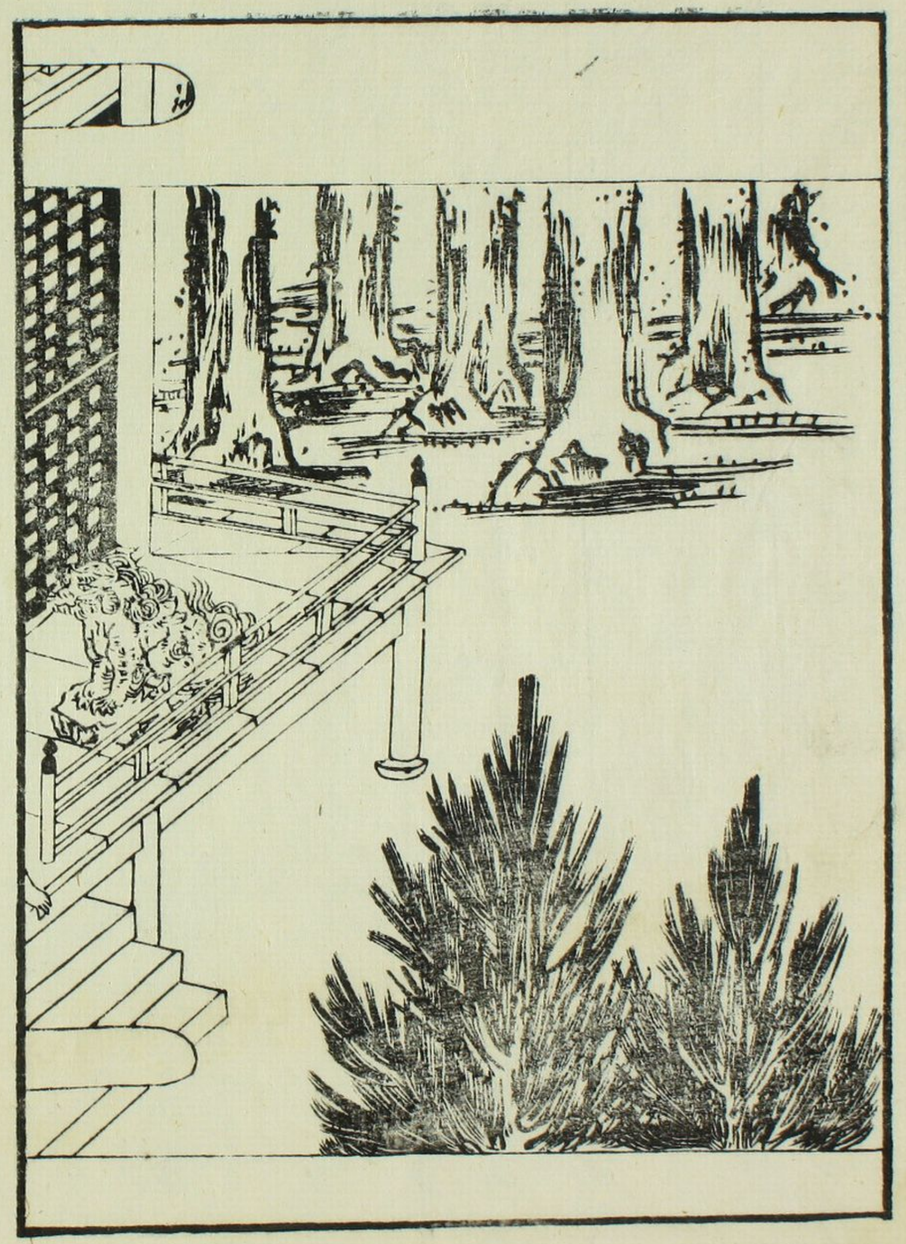
親鸞聖人繪詞傳卷三

聖人五條西洞院小まつ殿に住仲春の比常陸國
那荷郡大郡江の庶民平太郎とゝゑるの地頭の
役よさゝまて紀州熊野へ参詣するに幸わり越ゝて
此山へ参詣運ぶものハ潔斎おろそかなるべからす
まつ祥の咎ありて法人おそれわ（つゝ）紀ゆに
平左郎ハ當初聖人の教化ゆけ〳〵ものなるべ
共一心より深改よ酒依して後世のつゝめの〳〵成心ゴ
け給ふ山度乙者よかゝまを見地なく治ゝる聖と
べ心ゝめ中で先御法（まゝ）して仲の中成ゝ要く

義誠と蒙るべきよし聖人おさ〳〵て宣く抑如光
の方便は衆生を結縁して佛乙を引入せむ〳〵なり
熊野證誠殿の本地は西方の弥陀如來也
況ンや一向を専修の輩は諸でんに何の條所あるべき
本より内懐虚假の凡夫なれば法を外に賢善精
進の威儀を刷ふ色をかざりまこと心をかくし
小本地の誓約と信じ二心なく念佛して登山しこと
神威を恐れるよりは神明はもとより偽を宜賦と
めぐらしたまへるなりと云ふ事を聞て平生の所願す
なわち義を任せて道の仏法ならんと威儀を繕ふ事

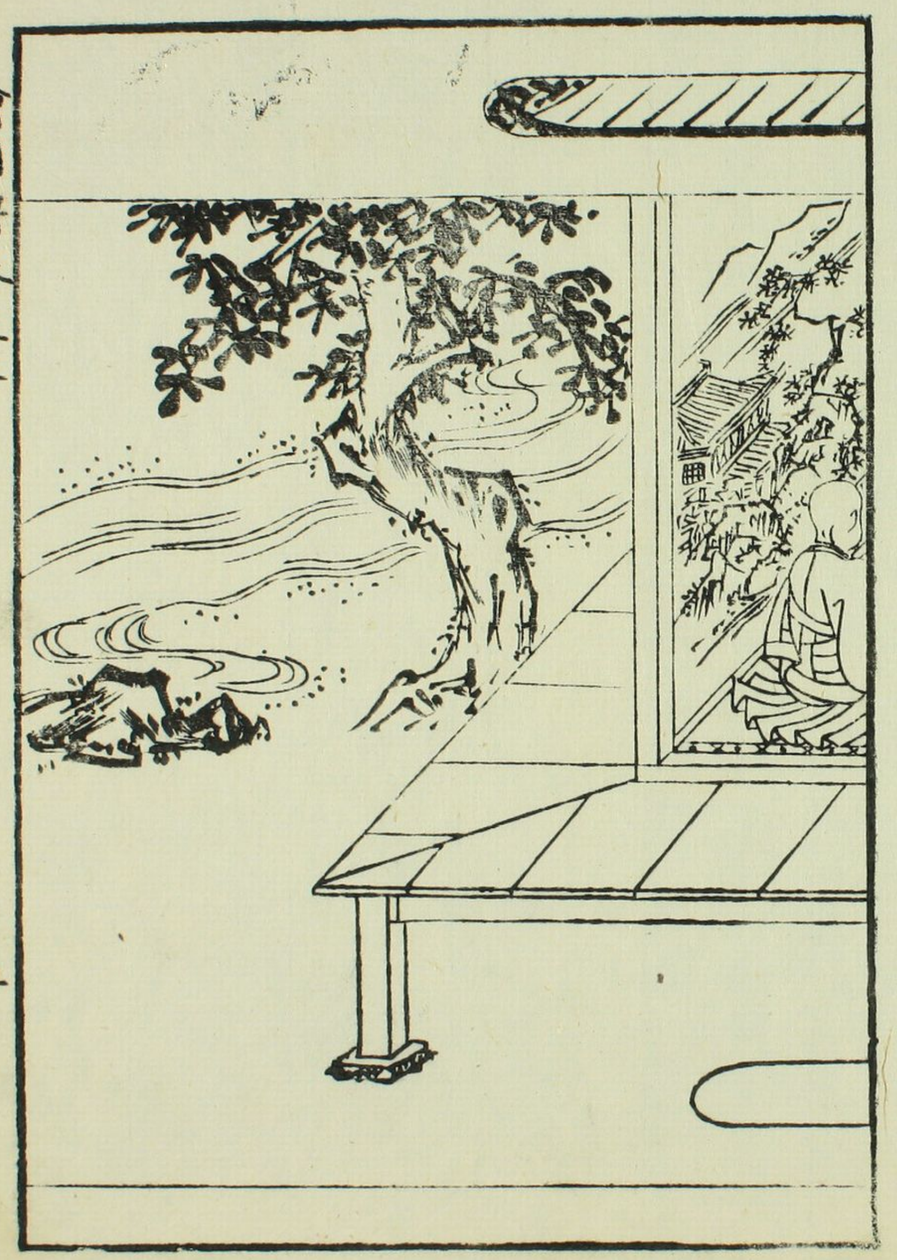
なく唯誓願を信じて他念なく果して往生を願ふ
えんぬ神前を通夜しくるに桂現實殿の扉を押開
き衣冠の姿を整て宣く汝何の故ぞ潔齋せ
ずして我前を参ずるや時聖人忽然くわ〳〵は
まを生のひ色い若信ぞもめ仕ふ〳〵ふる者を
作り作りなれば桂現勿論をもくし聖人を
色代わり敢く咎なる事なし〳〵人く笑ふ
おろかなる奇異乃思ひとる〳〵路の時聖人
く〳〵件の事とにさを有なむ〳〵作らまき
尤不思議のこと形容

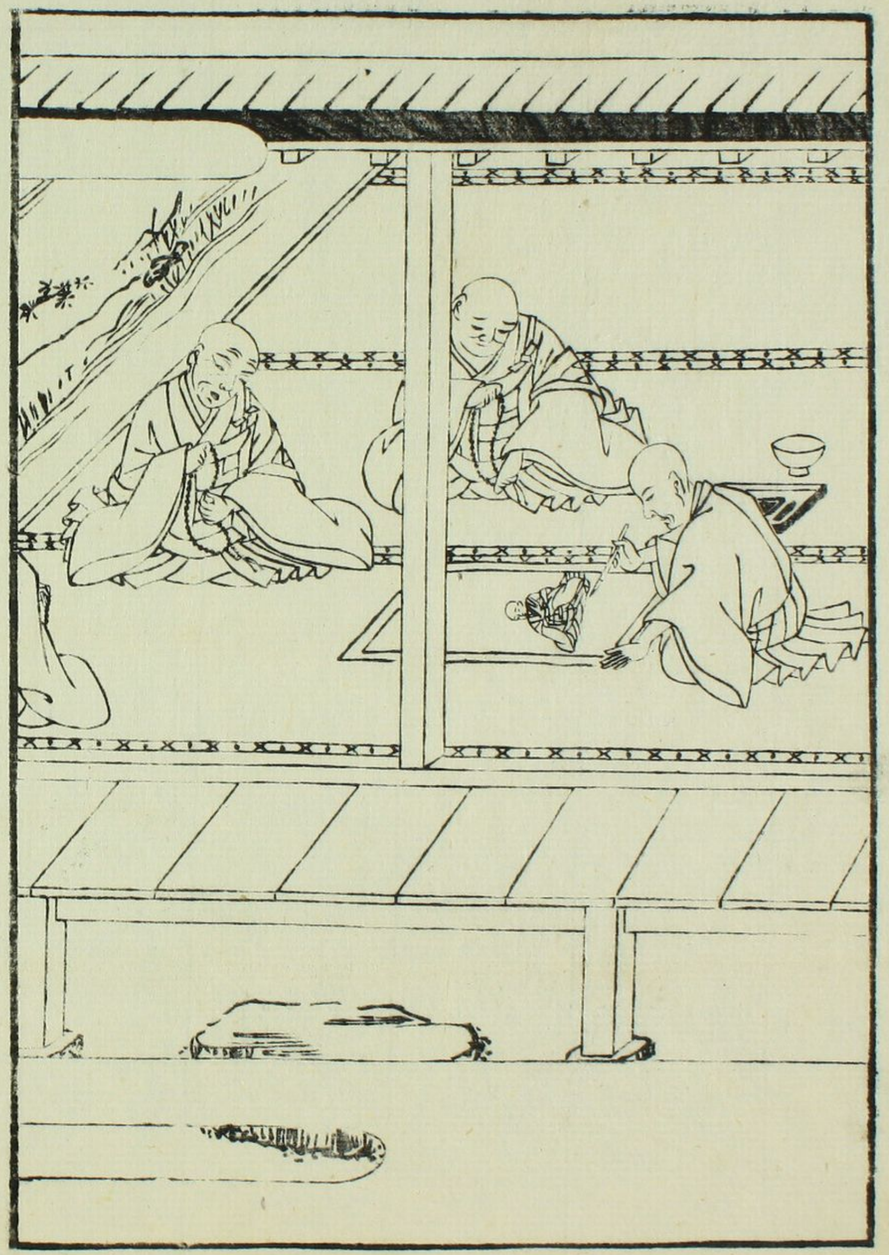




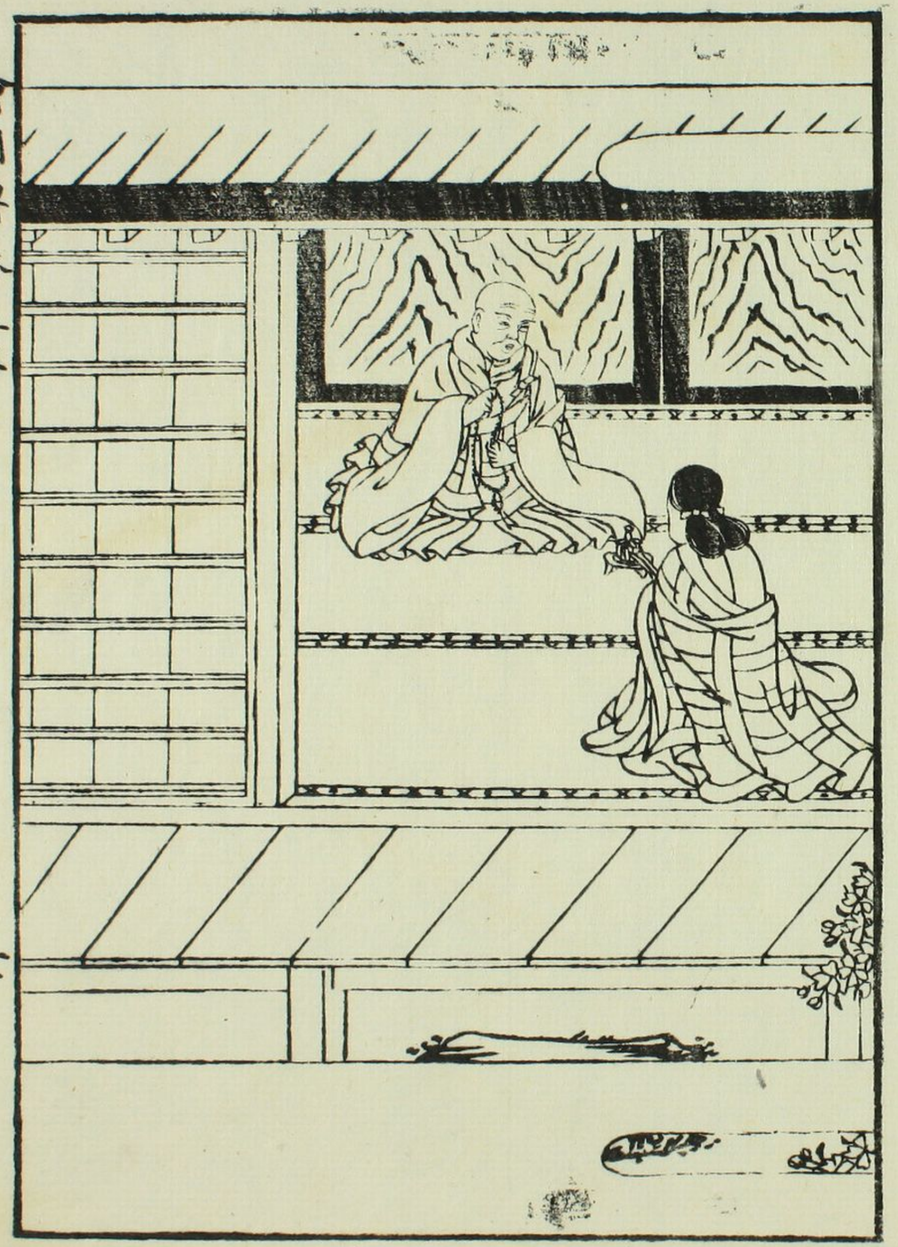
御弟子入西房日来聖人の壽影ばかりうつしとらんとおもひて侍りしを聖人暗よりこゝろざしをもたしめて七條辺小宅禪法橋と云佛繪師あり彼ふうにたゝしめよと仰らるゝ入西ハ雖察のなを試ばかりにうつしかの法橋と云て聖人のゐ給ふ様を詳せしかふ定禪法と流とゝ云るハ眠夜不思議の靈夢成ぬ様ゝ仰りたりけるを僧二人本ゆへて宅く然一人の僧を吉光寺本願の御房なり御ゆ僧の夫新ばかりうつしとゝのゝ夢の中ゝ扱ハ生身の体改ゆ来ゝ聖人と云

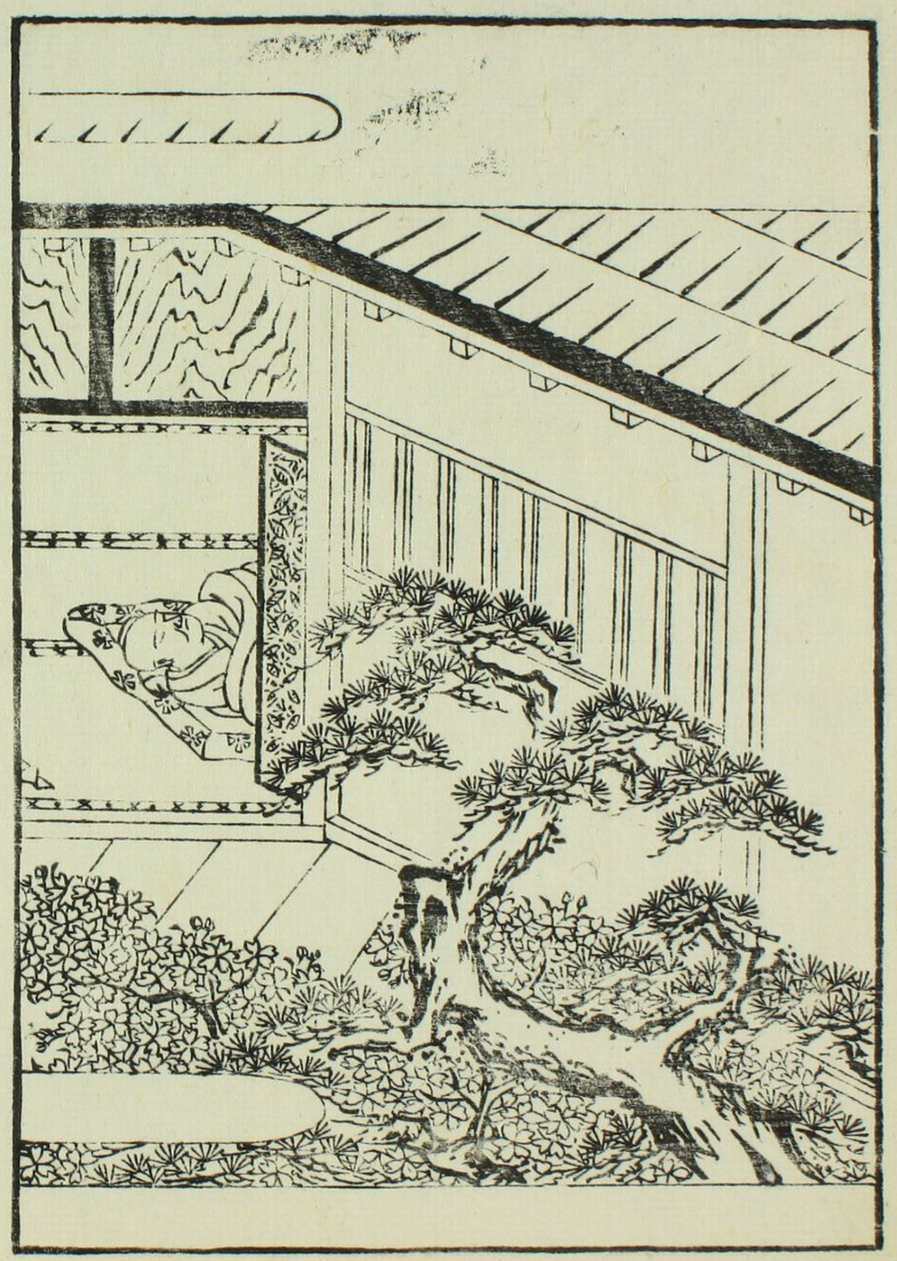
の毛ゝ一ゝとゝ云る教しきゝ今この聖人の容夢の中の化僧ゝ如も遠たまゝ成涙袖ゝ濡りて見えゝ夢ハ仁治三年壬寅五月廿日の夜ゝ仰きゝ聖人七十歳の御時なり





聖人七十一歳の冬時より八十六歳乃至臨終
にいたるまで聖教を述作編集ましまして滅後
の教化ゝ殘しをき給へり
建長八年仲春の比聖人いさゝか病氣わり
顯智房蓮位房ゝ人看病し奉るまゝに
に蓮位房問ていはく聖人はいかなる人と思
定めたまへりや顯智答て云はく如來の應化
とおもひ侍ること蓮位ものゝ肯ざる体にてさま
ゝ申も武時をさ思ひ事もわり又わるゝ時を疑もしく
又えの人事もいりまゝにしば顯智ハ茶とゝの
ゝ色しゝ女ゝかハ笑て色をうゝね内ゝ実に知た
まへんと斗りさまたりに蓮位房夢想と
嘆じぬ其後ゝ聖徳を仰ぎ聖人に礼をなし
てのたまはく
敬禮大慈阿弥陀佛　西方教流通未生者
五濁惡時惡世界中　決定即得無上覺也
時ハ二月九日の夜なる夜ゝて後蓮位房夢の内
にてゝ顯智房ハ神通わりおそ給しき人な
り〳〵稱げゝ色をきき

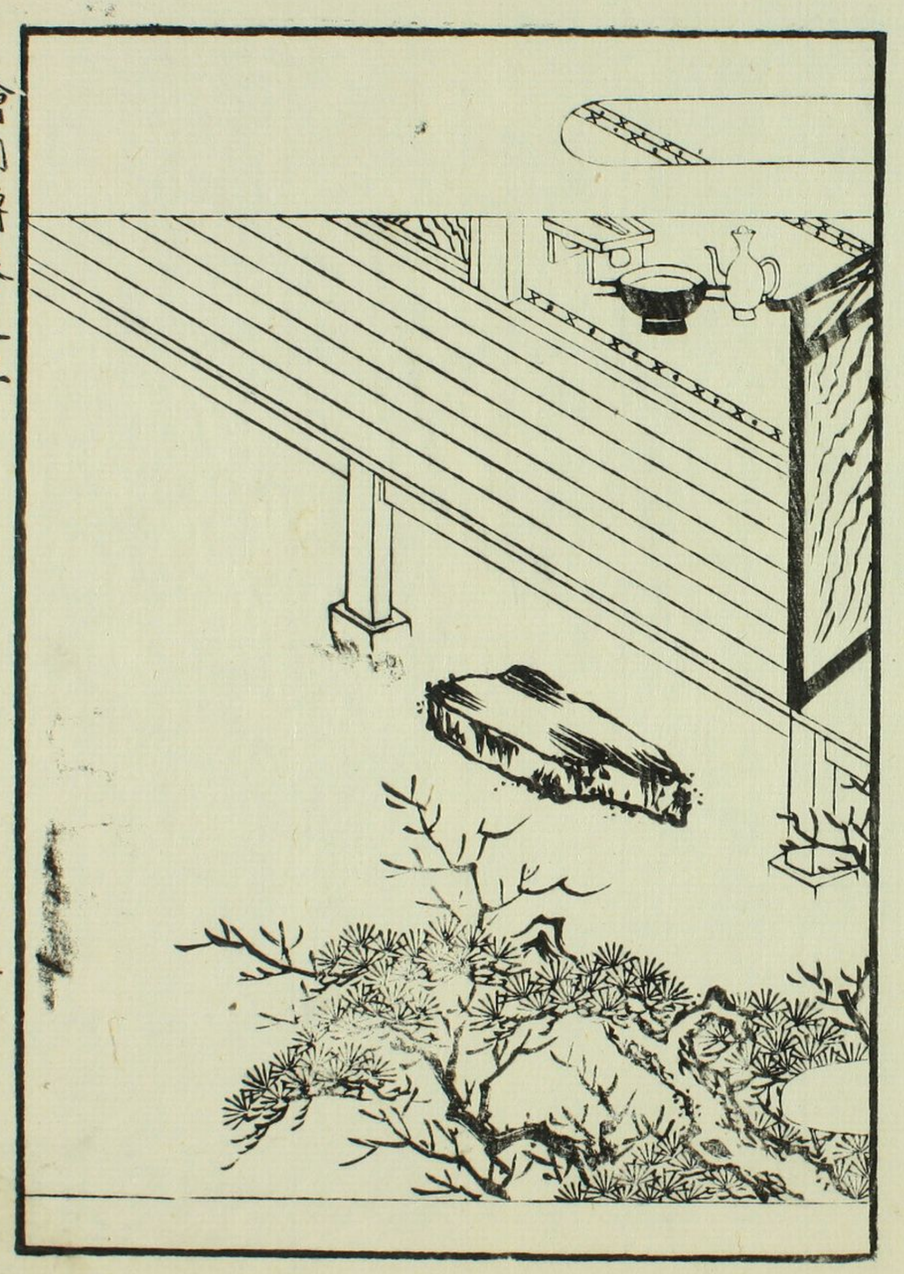


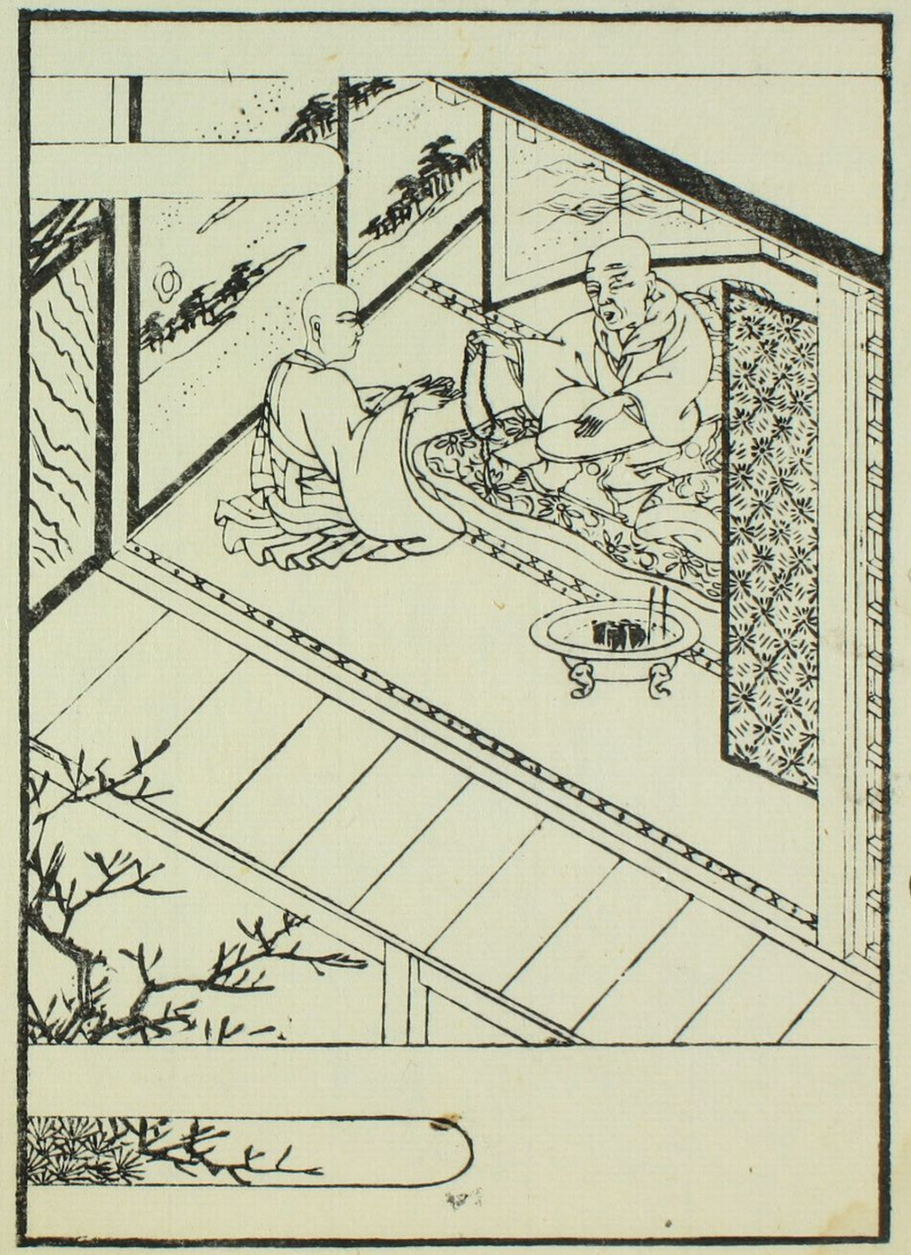


正嘉二年戊午四月廿日西洞院御坊に於て顕
智（惟授一人の口決）法御相傳すゝ同年十二
月廿日田専修寺乃住持職法附与之事也今
年三月真仏上人逝化ありしにより也
弘長二年八月の頃より門弟の事ども出来
して洛陽三條坊門の小側富小路の西側善法院に
移りまゝ住人是ハ御舎弟天台宗善法房尋有
僧都の坊舎也十月末に及て御光顕御心
地まゝしくき給仕の御弟子たち並に尋有僧都
のひとゝひて下阿房光正ゝ新系の御弟子と

使ゝして遠江國赤畑乃専信房の方へ文を送
急ぎ高田へ告るべしと送るに専信房
の計らひて件の使ど亟に下野へ十二月十三日に
高田に下向せきぬ其夜顕智上人の夢に聖
人若く宣く汝ゝ我法燈と挑灯き人なり
滅後急り形ゝ応生に法流を弘る事ゝくせよ
我往生も近付ゝり汝ゝ是法護持せ
しゝ云ゝ覚ゝ後ゝ不審濁多ゝに聖日京都の
使来て生ゝバ聞も申ゝ事ども出いで立ゝ上京し
を出ゝり専信も同道して十九日夜に入ゝ京に

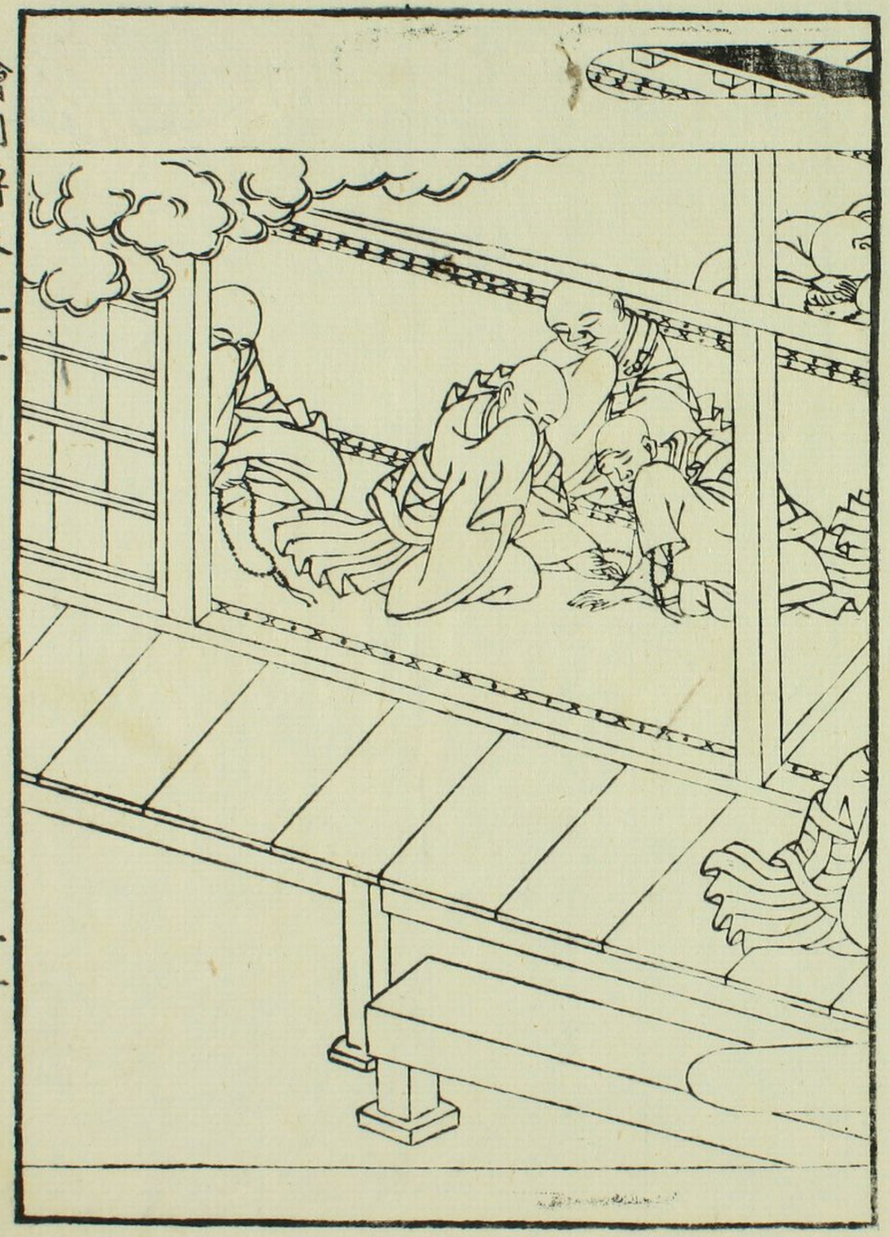
ちとまへ聖人對面ありて名へ何なりとのたまふ
ぞと宣へば顯智上人のたまはく御夢例
なる由光西が若下りし候しかばいとゞ
作し聖人開眼光西が河内へ下りて申し聞
せしかばそれは東國へ下る事成我しかるべき
玄昉ぞ然ば八幡菩薩ものたまと
ありしかども光西なほ専堂へいふ〳〵御尋わ
ぶこと八月より深海に共に奥州へ下しかば
たまへば此事こそ對面しなかりしこと
なれと宣へば聖人主殿を御いとまも聊暇
を二三日の間を関東乃番に昔は御相伝の式作
らるて御氣色もなりうるる顯智上人御
側をく給て御命の門に開東の慈信房も
聖人を候所〳〵中を度こそ〳〵
よりも聖人宣て彼ものかくて居る
ふかくて西りに我法の離しかるに和尚ゆ
き事成ト云ふの式〳〵候所作ふたま
ば顯智上人も事成得ぬて止
ひぬ二四日より八日は事成のたまひ当
ら称名の〳〵勤ひ二尊廣大の御慈悲と

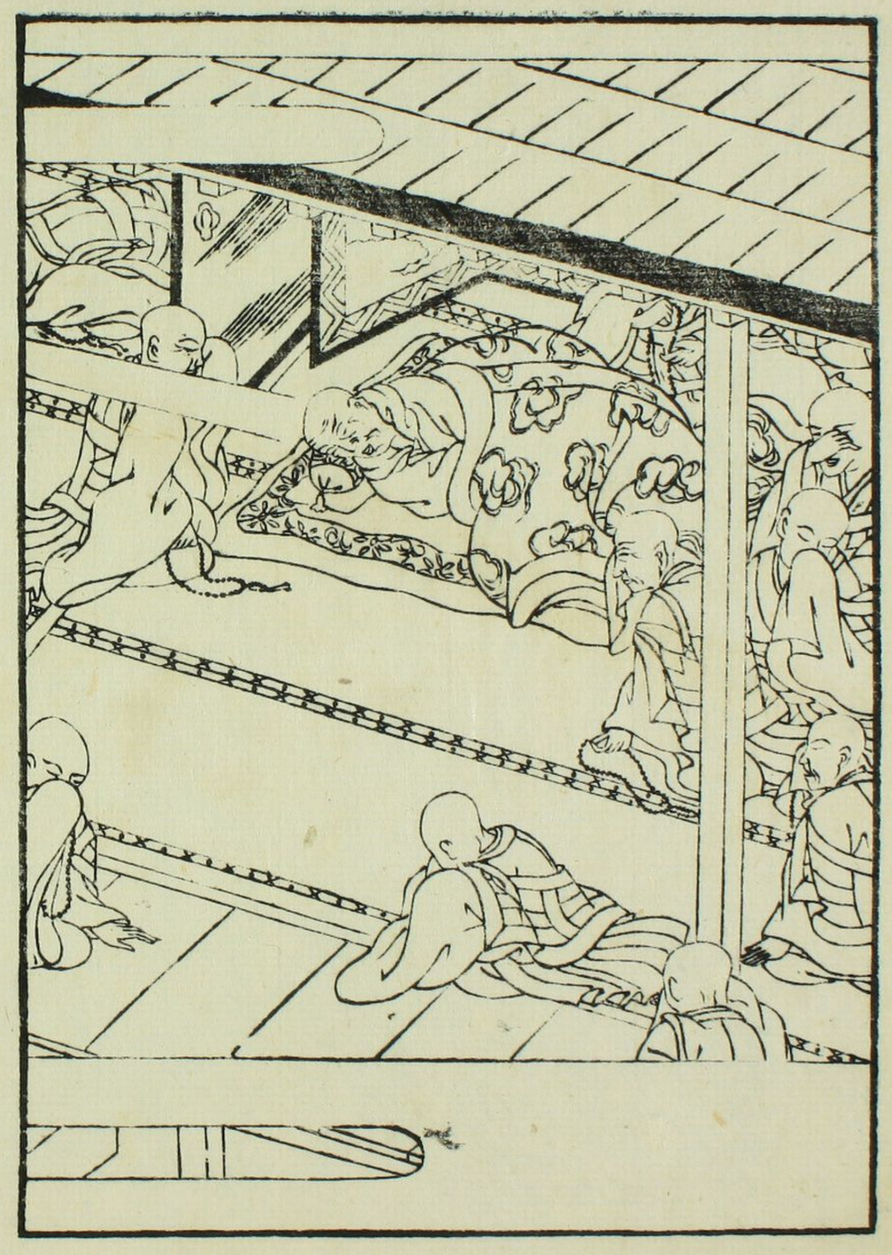




源空聖人の御教化よりこのかた聖人一流の行者
のこゝろをえ出て侍るなり。建久七日中剃御沐浴
あり。専信房を御使にして御髮を剃しめたまへ。其
後人々を召て頸脳上人一人を御側ちかくめ
さるゝ。ふ御相伝まゝ。御相伝の念珠を賜り。生てのを形見と
見たまへ。御ことばをうけたまはりて頸脳上人
涙をながして立おて御涙をはらはせ給ひ
同奉じ。只人車のわだに御乗給の門に中まで
ゝ行たまひ皆々涙をながし障子の門に入給年来の

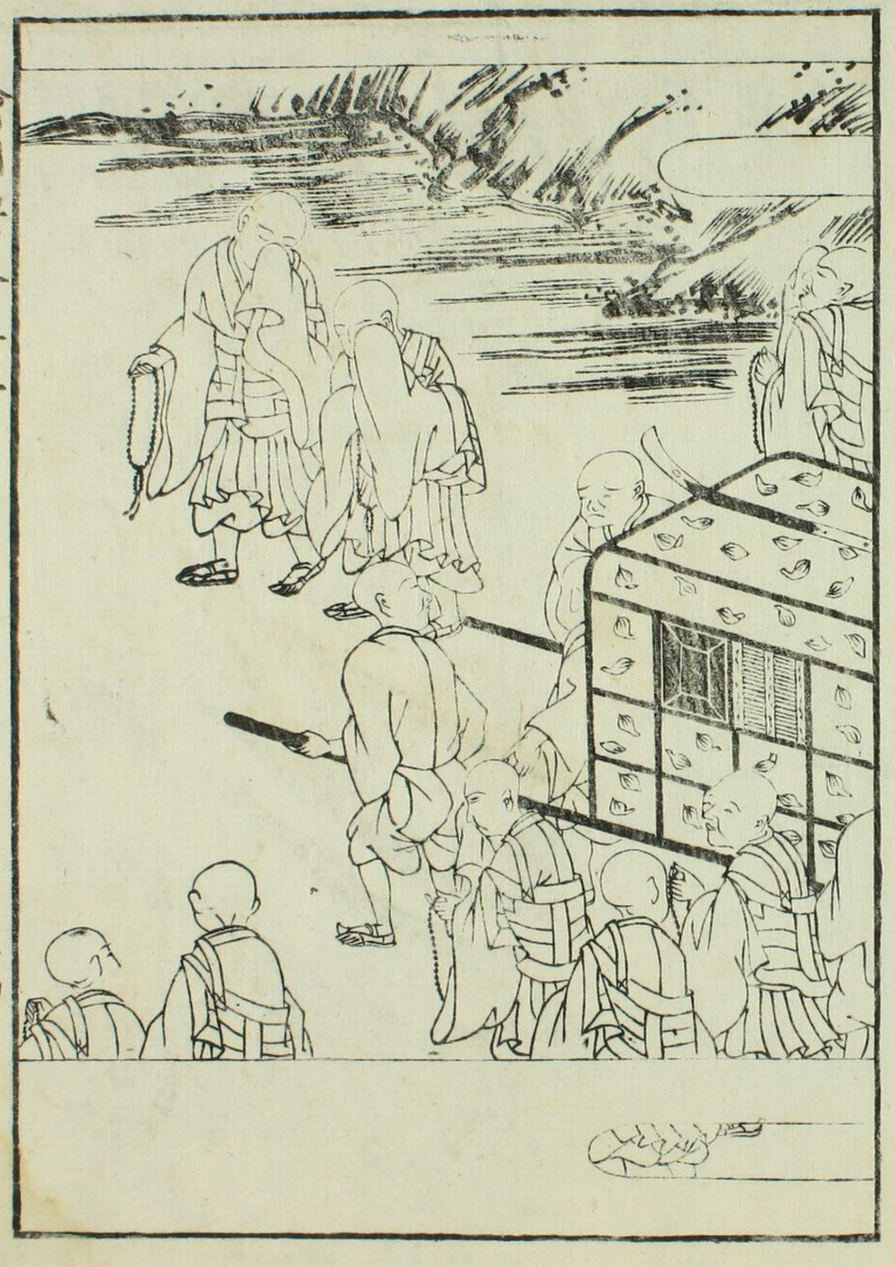
安心を御ものがたりあり。聖人仰ごとをうけたまはりて唯何
事も浮世をこゝろにとゝめず後の御菩提のこゝろざしを
二十八日午刻にあつまりて頸脳上人面西右脇に臥給ひ
称名の聲と共に御息止給ひぬ。時に聖人年八十九
代長二院御宇弘長元年二月十一日聖人満九十
歳也。満座の人々佛日没し法燈滅ぬ
て悲の聲止こゝろなきに。時に行とつてたゝへなる
香気室に充満し。紫雲西方より来り白毫の光明称
こゝ来りて庭にいりて彼方の中に畫のやく
明なり

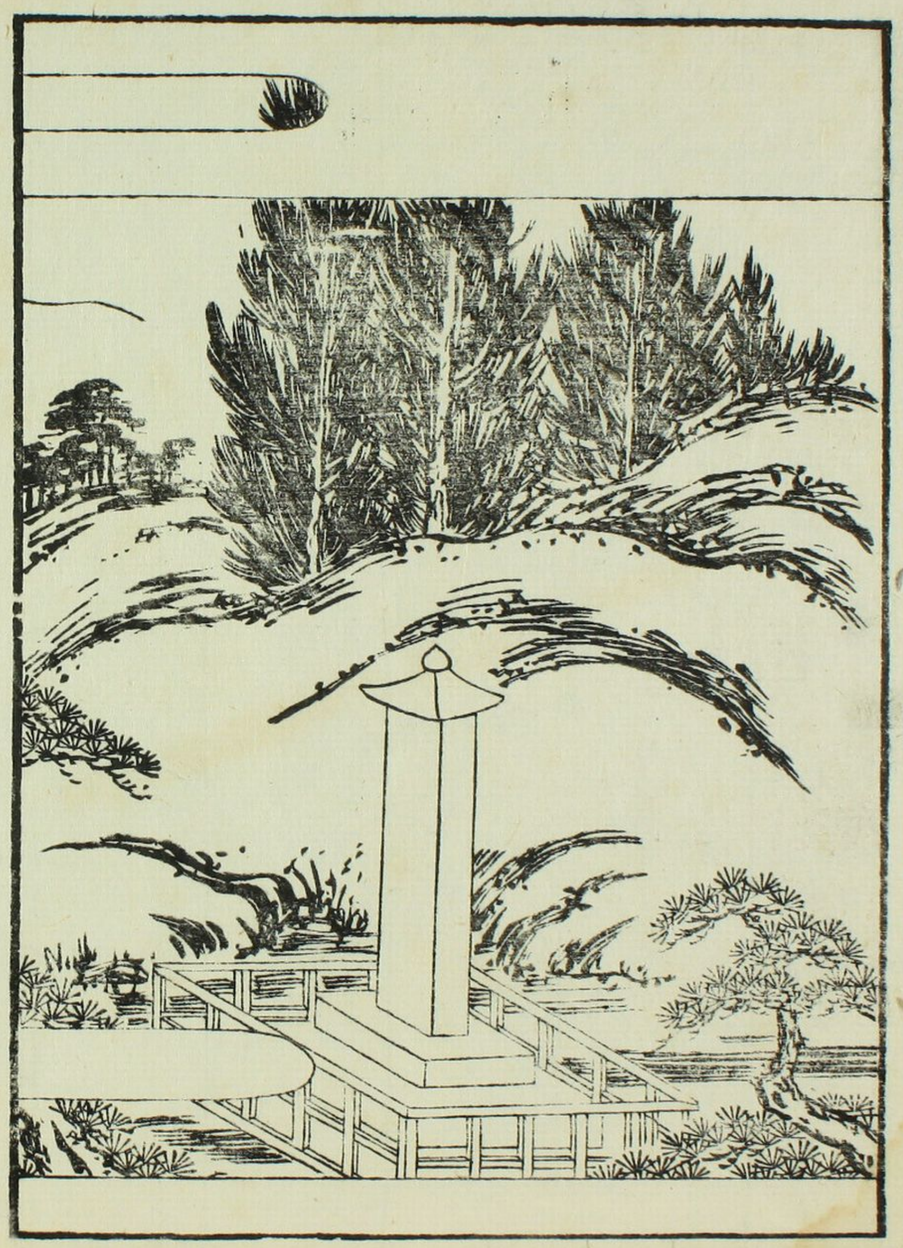




翌十九日送葬し奉る印信と専住く御櫃と舁
顕智上人以下の御弟子達八五條の袈裟を召し
草鞋を召せる御後より従ひ尋有僧都も
御供し奉る浦山善法院より京極小路五
條の橋迄ふり河東の道伝に鳥辺野乃南
延仁寺に三昧を造て大葬し奉る
三日ふ立て顕智上人を外給仕の御弟子達尋有
僧都印信等の人々葬所より遺骨を拾ひ
と西骨二十粒を修ふり十二月六日東山右水の源
坊の隣大谷に納めて石碑を建る五旬の中間

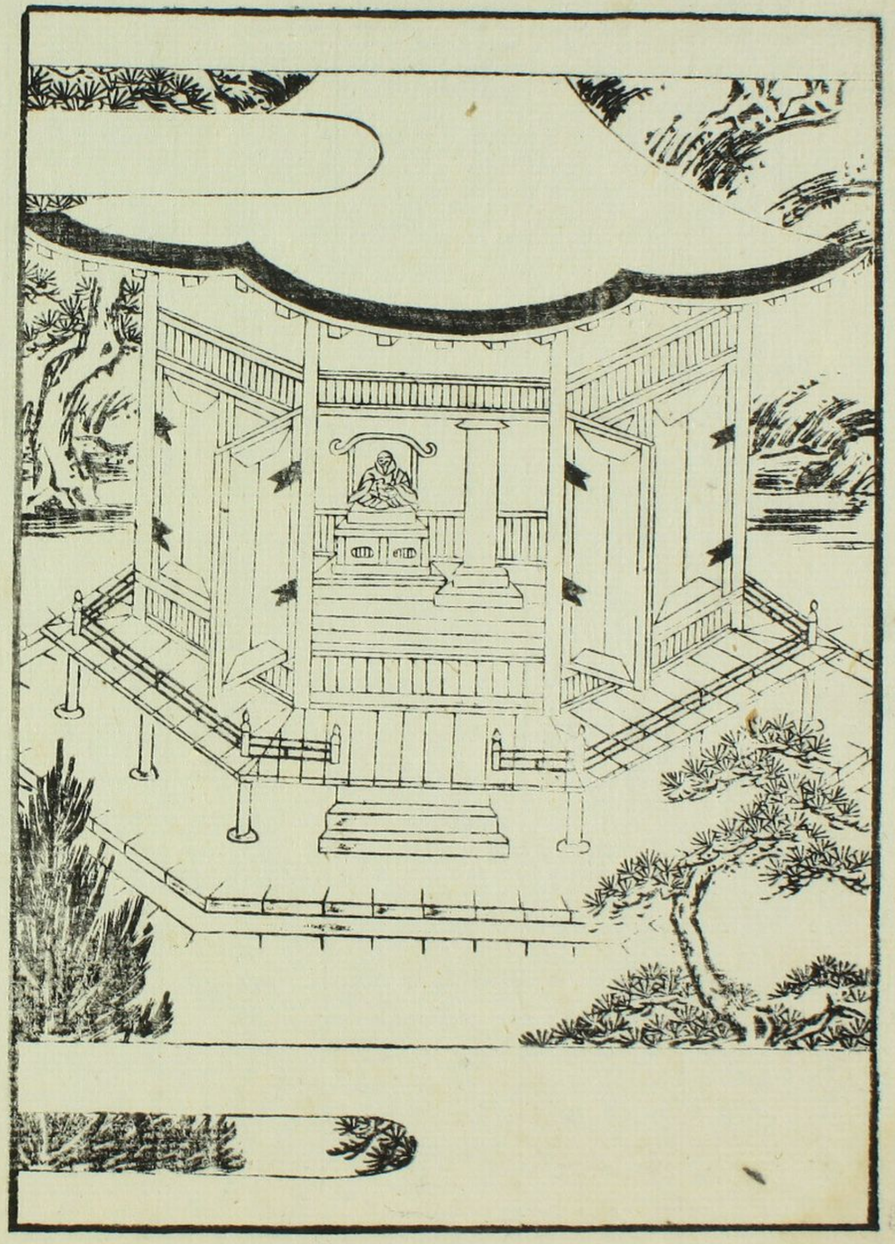
京に留まりて見伝ふ惣計二十五粒
の遺骨の内九粒を惣骨と大谷に納め外十六粒
を相の国に收て顕智上人を伝持下る田
に御墓を築て九粒を小納め五條の七粒を
顕智上人の許に持ち星霜年九月廿日大谷
乃墓所に印信僧都より二丈五尺十三重の塔
を造り碑に正て建る





聖人滅後六年に成て文永四年丁卯顕智上人
上洛わり大谷の墳墓に改め修ん為と為
京有基の所持大谷西の禁の地に買求む東
西の面五丈南の面十三丈五尺北の面十丈七
尺なり
同九年壬申八月顕智上人上洛わり祖
師の廟堂建立の事に奏聞せられ
に述ふ綸旨とゝ賜ひぬこと上りて前
ゝ買たる新地に跡の御墓に
に引移し廟堂に建立して真影と安置し

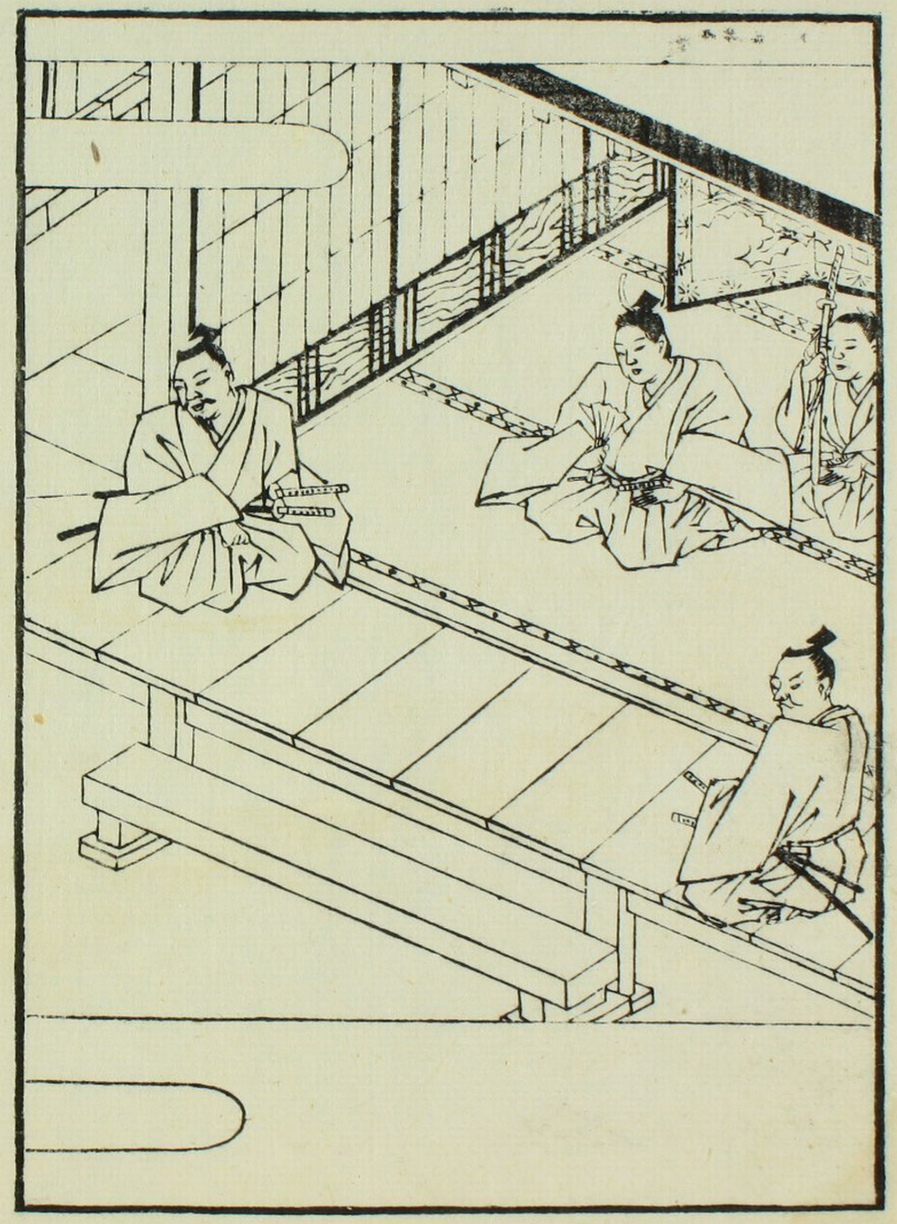
勅願寺と号ぜられ上聖
人御入滅より十一年の後亀山院御宇文永九
年壬申十一月廿八日に成功法事とゝなる



因ニ祖師面授列祖の行狀ニ尋るに
第二祖真佛ニ人を俗姓平氏ニして桓武天
皇ノ苗裔頴寺府將軍國香ロの後亂下
野の國司國春の嫡男なり俗名椎尾弥三
郎春時と号ス父母子なきニ因て父母ニなきニ因て嘆き
常州椎尾山の神ニ祈ル霊驗を得てこ
の子ニ生むしりあ椎尾ニて家名ニセ
ル十ロ歳ニ及て才智倫ニ超り文と武ニ
て政道と同るニ百姓ニ其判断の明白
なるニ恐ル聊も謀ル事ニ巧むものカ
ラず

ラくして罪を欲ル心なく後世の氣性ニ
ハ たゝ重科の事ニいへども数を事ニ
ハたまへる父國司なるニ春時の器
量ニ試んがるニ問て云夫一國ニ司ル職ハ
善ある者ニ賞ニ下ル悪ある者ニ罪ヲ
行ふこと政道の正しきなり汝ニ試新ニ
のぞむ毎ニいふ所ル孔罪の者ニも郷の理
とゝけて数罪と免ス孔かくのごとくなれ
ハ蕃くの輩罪とおそれて却て科人
多ケれ〳〵汝が意いかんと問ニ春時子

試撰め給て云果如来の名なんぞ涙を意
とるべきん但おもんぐれば閻魔王の六道の罪
と変断する職にして人天地獄に落ぬべきを
も見懲せ給べきを閻王の庭に罪人の絶る
ことなくまこと仏の慈悲と職にして好る
悪人をも救たまへども我も後て仏の清
土に悪人のつとめも聞候ぬ抑一国の民も
閻王のこびき改道とや好候ん候まこと
仏の慈悲とや好候ん果ては百姓萬
民の好む所に従ひ侍ん事なる計にて
候なりとこたへたまへば父国司も理ふ伏して我
子なれども賢者の器量あり喜たまへり
国中の人をこれを聞傳て天晴民の父母なる
人なるたふと羅あり一命を失ふとも此人
の戒教に逢て死なんこそ生前の名こび
なりとぞ申きり



十五歳の頃より聖人の德風を慕ひ時々禪坊に詣でゝ
念那弘願の深義を聞うたく他力佛乘の眞風窺へ十六
歳三月中旬聖人の御弟子に成入して重ねて他
力法門の眞義を問ふ聖人言く他力の義なるさ風義
と樣なきを樣ゝもるこゝを他力の姿とは作るな
まてゝ春時感心のあまりに涙を流ひて頻
に落涙し涙を拭ひて拭ひ拭ひて涙と拭ひ拭ひて聖
人と眺ゑ合ひて竹椽に下らせるが悲哀の聲して
ひけしつゝの人と渴見ます日頃をこの聖人と
唯ひけとばかり思ひし唐土の孔子を見れば

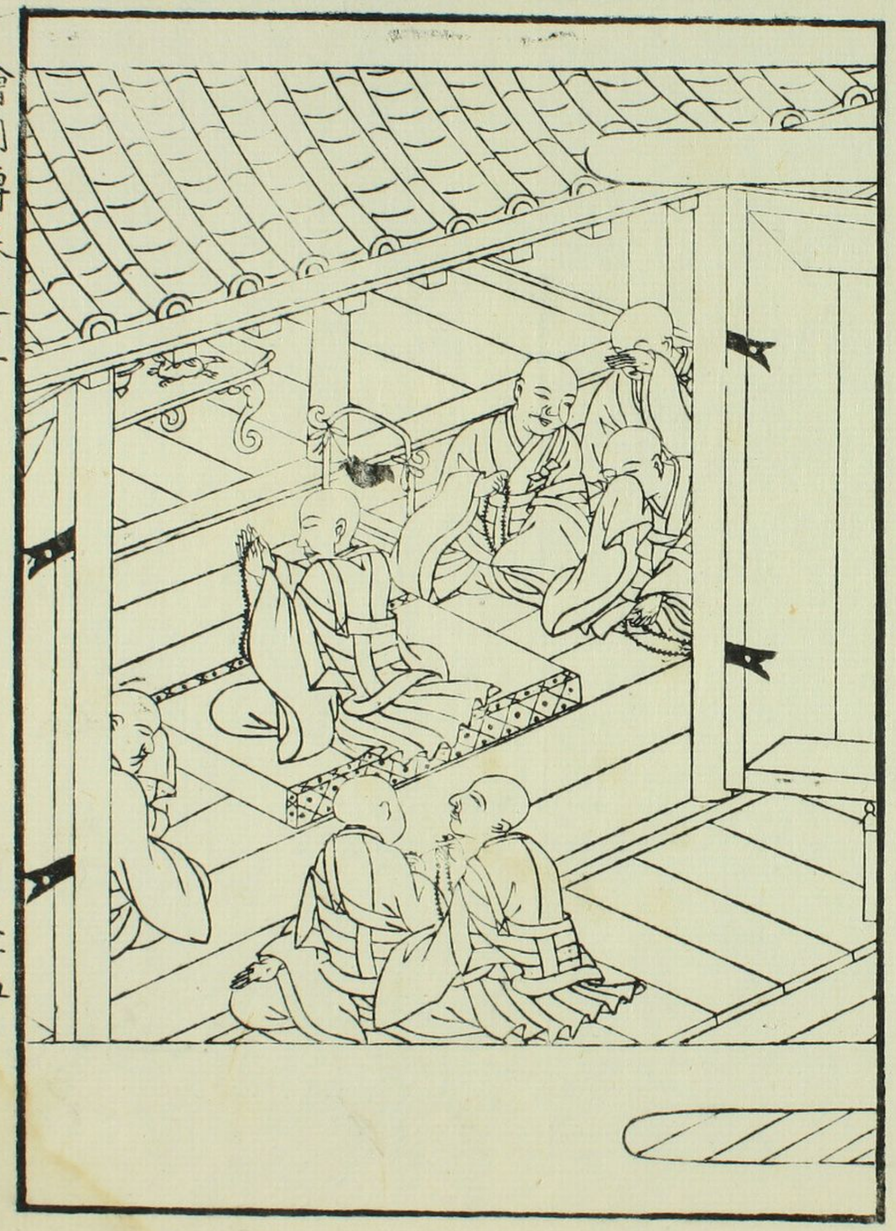
吾朝の宣化御門を仰ぎ二聲一首風
地ふつけて礼拜して帰らまとり折ゝ乘
然房順信房なんど御庵室に行て法わりを
こうしいとも其意風知こなり後の時まと称ら
まに退出乃ぐぐ順信房たゞ称て云先の時ふ
りくのたまひいふ形る意そう侍ん春時答て義
知る風義ゝ樣知ると風樣するい唯ひけの法を
人師の私乃法を問ゝ吳國の孔子ハ唯先王の道風
述て後人私乃法風のべぐ吾朝の宣化天皇ハ朕
ハ天ん法度風行ひて王の法度風行ふまきく宣

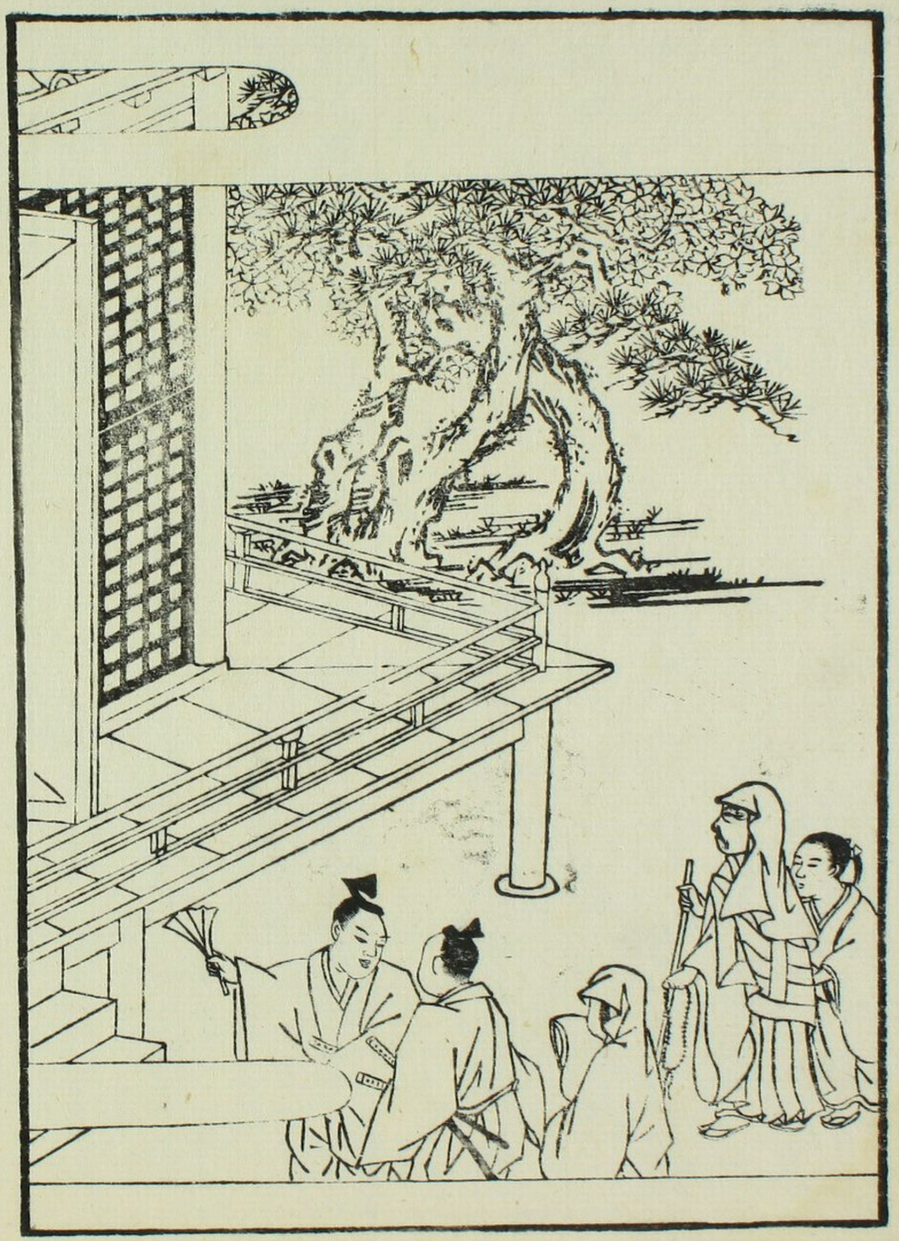
（是）は私かに示しうるに拙どれば三人ともに
知らるる聖人なりと思いまうすに如法ハ俗
しくして帰らるるより聖人ことに汝聞いて明日門人
集會のみぎり仰せられて云昨日春時の一言
わのくを何ぞ聞きたるぞ当初大師聖人
御弟子三百餘人の中もかくぐらの一言申なる
人ハなしと志ばしし　如若の人なるも他力の法門ハ
於て聖覚法印熊谷入道なんどにてみぎりまし
小覚ゆるなりと感激ハ餘りて見えたまう春時も
亦この事汝聞ていまく聖人小帰仰ありこと猶児

の母と思ふ人なりも深く命ぜり編小浄土の法門と
学ぶべきこと若次ハ汝ともに顕浄土ことに
ましく汝聞こと　飯食の間ハ口ハ文汝
誦じ給へり十七累の十一月祖師聖人汝拡法利
益ましたまふ流ぶて学三発
ハ通じ利他汝て任ぜん常に聖人とともに
て高田の寺勢と看命又時ハ城州山科ハ遊
化ましまし寛喜元年の秋聖人ハ教行信
證の奥義汝相承し同じく祖師の命ハ
随て諸宗ハ為ハ選擇集義ハ教行信汝諫汝

ちなみに貞永元年高田住職の後も盛に奥州より
下りて立川の邦義氏權さと又は甲信二州より往て
勧化しのみに道俗系の風に靡ぐこと四十六案
麻鴻の神官等ぐ拙信ふかくして往生要集氏諸
説をたなみに出家わかまり学さ住侍ともに帰依
おく四十五案より引清に対のむさたなみに自
行氏こげみたしこわかに四十九案十月京都にて
本師聖人氏澤しに十一月下旬高田に下向
多くまこの時聖人に辯してのまりく生死の
さどめのもぐる澤命の記ちがぐ氏れじも

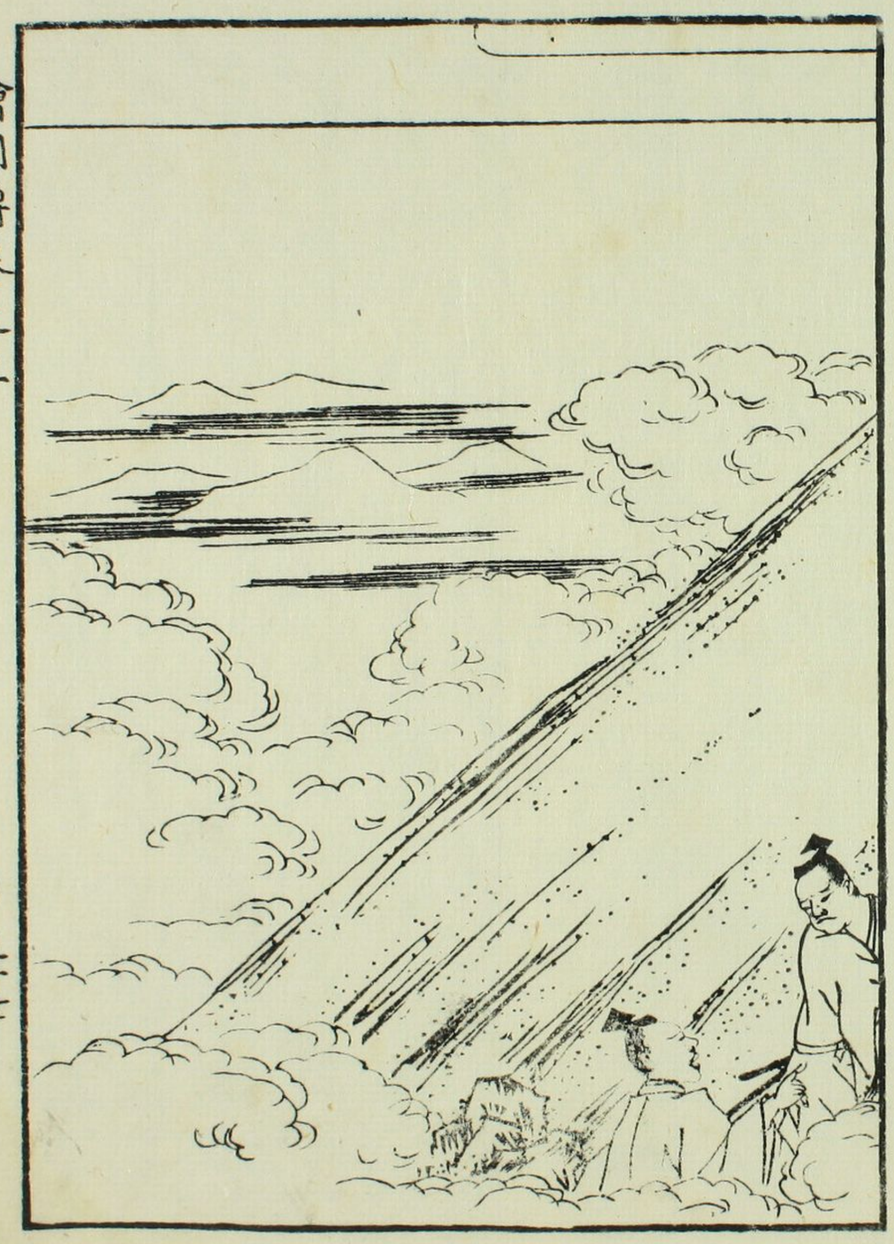
真仏がごしきは明年の春奥州に安堵界氏ちん
今日の恩重これ間深の水と別なん再會氏浄
土に侍奉るべしと聖人をいくかしく思て夜く
共に若集滅道の堤まで送りたびに悲泣して別
なみに五十歳二月より日毎に門弟の道俗と招て教
勧しのみに世の永別氏示せいり三月
朔日衆人に暇乞して編に通達念仏をのみ
唯大門の專空長沼の住性二人のみ給仕せり顕
智專信ハこの時都にわる同五日近國の門人と
招くに常陸下總上野陸奥等の門弟競ひ集

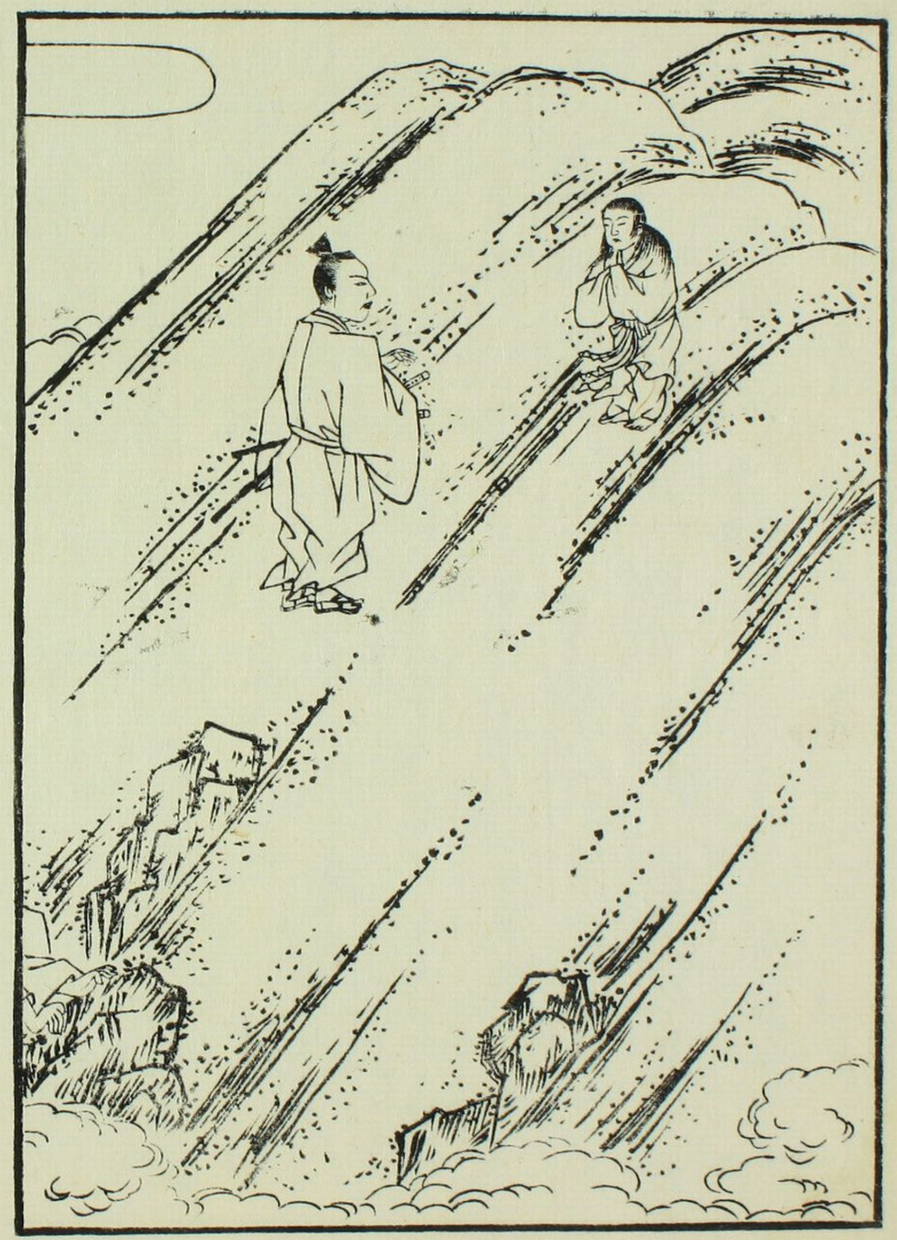




る八日辰刻新浄の法衣沐浴し諸弟子に告ていはく
貧道今日安養に往生とゝのゝ動行況ばゝ
して如来堂の正面に端坐合掌して南無尊に
相ひて諸弟磬と鳴し伽陀と唱へ称名合殺して
末刻に至りて師ひとり高聲念仏四十八遍し
往生不労諸善業端坐合掌證無為と唱へて
坐しかゝ化寂ぬ維時正嘉二戊午歳三月八
日也二日に至りて送葬に身體なかりとぶら
ふ合掌みゝまゝ春秋五十歳高田山乃住
職九二十七年なり

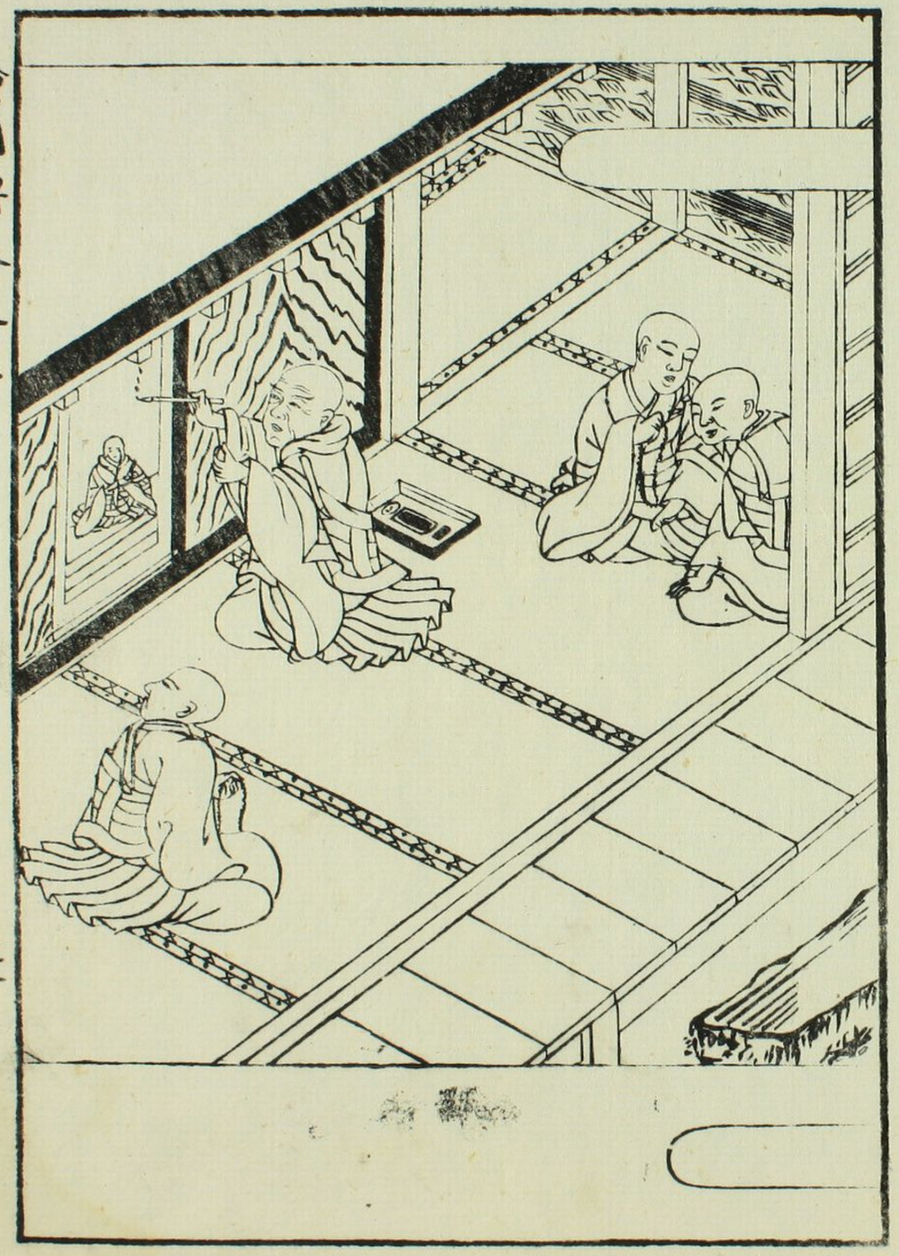
第三祖顕智上人とゝもに化生の人なり越後國に
余五將軍の後胤井東基知といふ人ありこの五つ孫に富士の神
と信じあるゝ富士山に詣づ天化の遣に一人の童子ありて
立つる五六歳けだりかして髪長く垂て眼に稜あり
童子いはく我はこの嶽神の子也祈ゝ云ゝ
なんゝ因てとゝまりひて家にかへりぬ故に平氏
氏ゝとゝもに書に法華しむるかいとつて一と風て十
に通ぶ一日國上寺乃僧順乾この童子に見て云
これ神人にはあらじんば悪ゝ善薩の應現歟ゝむ
九俗の家に養ひ育ゝ乞得て弟子ゝん

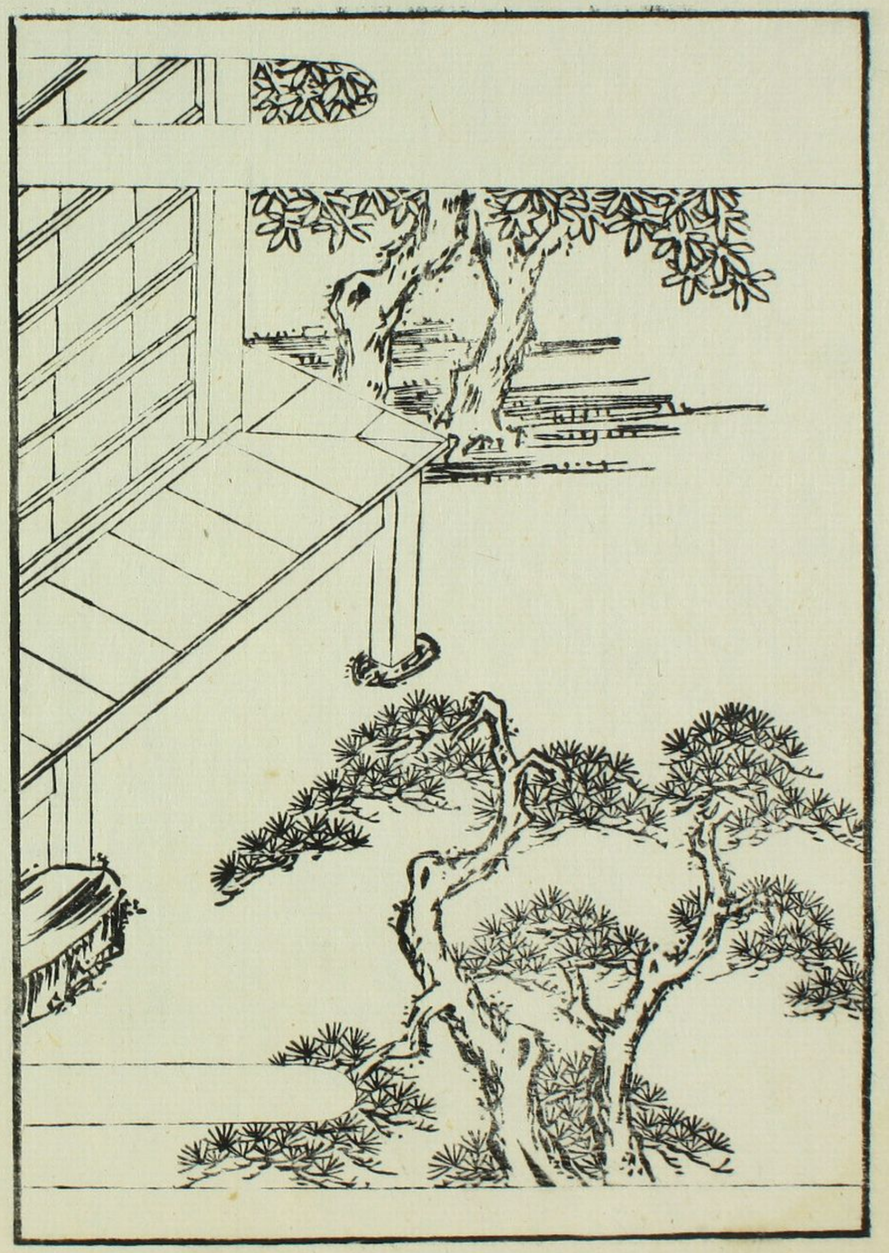




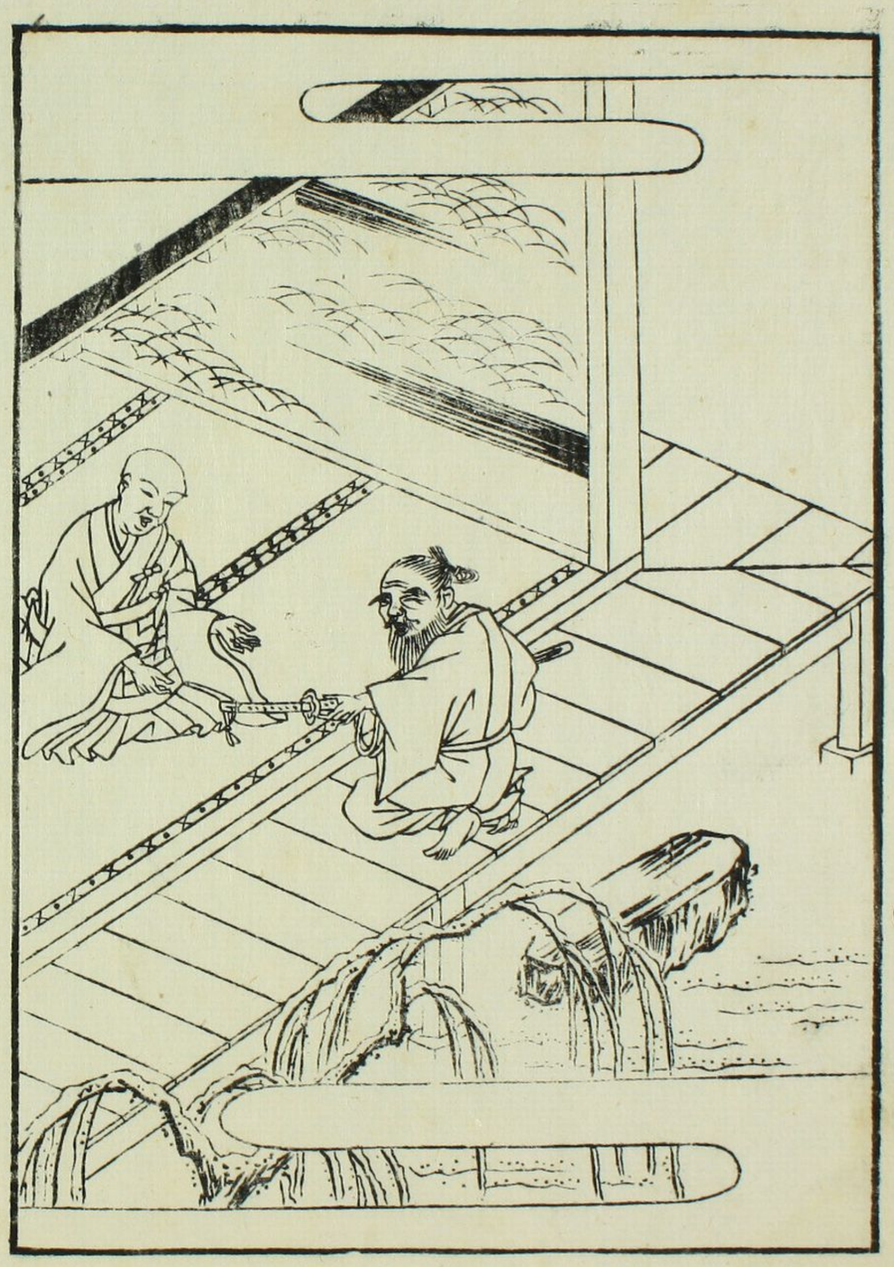
祝ふ人とする聡敏永羣わして誠に凡人にはあらず
況見くこと多く經籍の所ふかく示あり叡岳に登りて
しこ自ら律ひて登山し東塔の賢聖僧都の坊に入て
出家し國上若賢順に学ん蓋荒後二師乃名氏取れ
る學業日に新たなるに好て法華華嚴に屈く大
旨に暁る山に住こと十年たちまちに師父に辭して越
後に帰りこの時順乾とぞ化導し基に
夫婦もまた死せり賢順悲歎して忘れ難く学
業いまだ稔らずして故郷に顧ることなく暫く師匠父
母にまつわれんが為なり今師父ともに失ぬ無常の
頼なき事如此止まんたぐりに名利の羈に脱て心く
に出離の直道に赴むかんとすれども一時國の國分寺
に遊ぶ或人ありかく親鸞聖人の潤益に語る賢順こ
れを聞て感ぜ入ぬ迷に野州高田に行むくるの時寓
師に常陸下總に教化たまひてたぐ真仏房のく
高田にまいりませり因て暫く門下にとどまる法宗
の法文に聞ふれて自得らく生死の頓乾と出
て大荒に昇る萬人に延て若海に渡る御ことを
まるハ分とまること遠州素畑專信参りて同く門下に
投ぐ故に二人常に新金の志わりかのく國に赴かんとて

専修の道に練磨を明年再び高田に来りて祖師に
拜謁し玄奉の約によりて専信もまた来り主僧房
二人に次第して雪人の御弟子となりぬ
名を顕智と改む于時安貞二年戊子五月二日也
その後毫夜祖師に随逐して浄土の教相真宗の
奥義を学び師命に依て勢州に化し武州に教に随
て延暦園城に入て舎那止観の奥義を学び南
都に住して華厳唯識の幽旨を窮め南北乃
諸師に学ぶその後智と称して仁治元年祖師より
教行信證を相承し又師命に受けて遠近の
諸国に往て教化し建長七年祖師乃真影を図
画せしめ祖師筆をとりて法文に題し
て附属したまふ





まことに表行院の蘊奥に同参するに及て一十二箇の
秘決を得たり後に祖師御消息を賜つて顕智
に親鸞が再び弘通成るべきのこゝろを
のたまへり元来不測の神通を高田住職
の後も毎年二三度上洛して祖師に参詣
みちゝの化導まことに盛なり弘長元年
北国教化の時日光山に権現垂
迹して浄土の法門を聴聞し法名を信蓮
とりて性海に授らる其年の冬白衣の老翁
を刀一口を持参りて云へり日光山の遣
使この地にこの太刀を置て火難を守りの霊験
あり買求めて寺院の護とすべしと上人
に価を問ふに翁答へていはく此価を先
世にて性海に賜へりとて面を向て去たりき
上人これを日光権現変化乃神験に擬
せらるゝ所なり



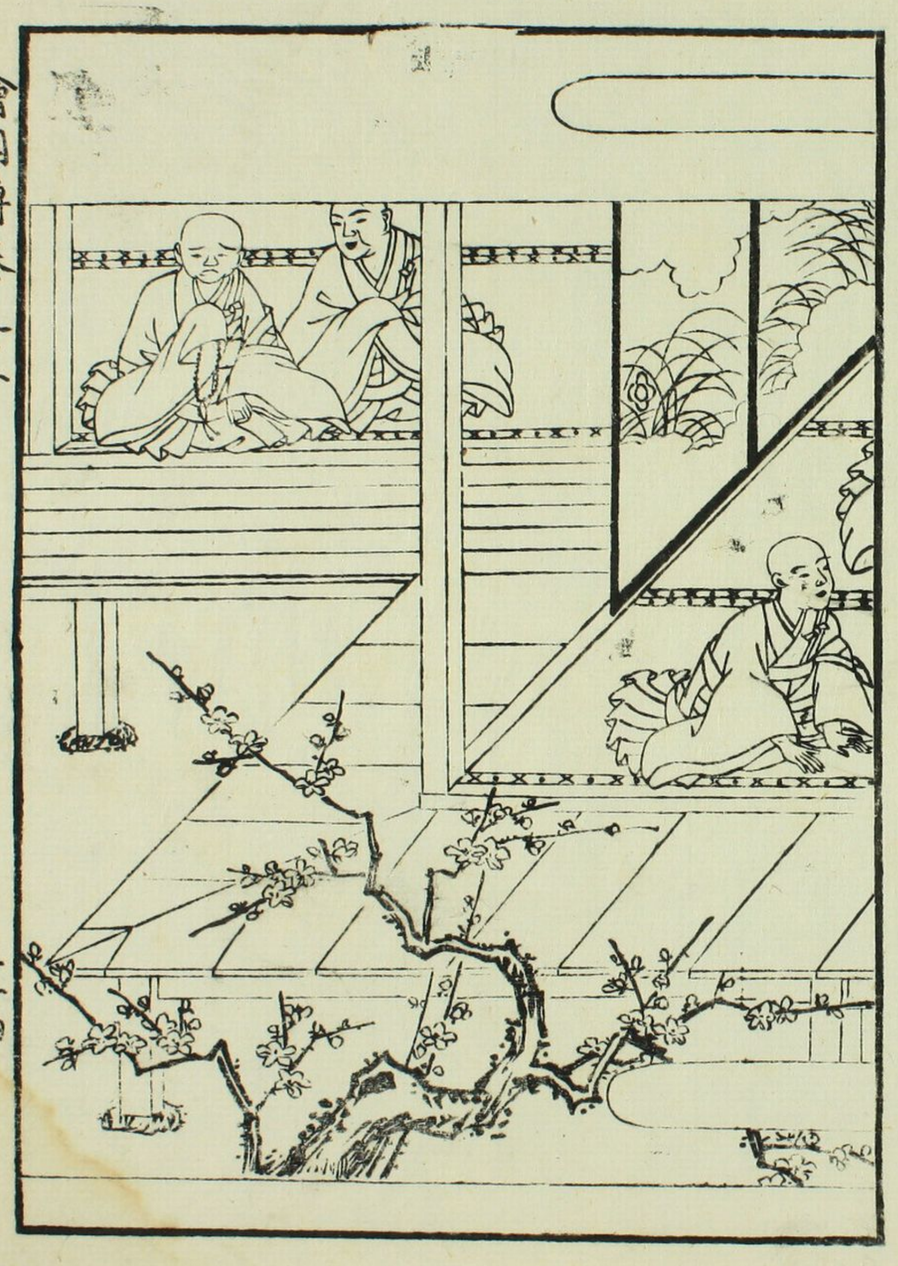
祖師滅後大谷の廟堂を建立し成就の後は寺
務と同じく法人仍て高田の廟堂の開基
と人代共をとよりて高田の住職なるべし彼地の
法務事繁く折々田舍へ下りまする人故に専空と
源海とかるゝ廟堂の寺務を助まる文永十一
年甲戌春善鶴の子如信が姑妹覚信尼の招に依て初て
都に登る時に二十六歳也まづ青蓮院の門徒良海律師
のもとにふかりて学問あり明年建治元年乙亥二月五日今
師上洛の時覚信尼の方へとて如信を渇見せしめ門弟
となりその付如信受法の一紙を捧らるる其狀云

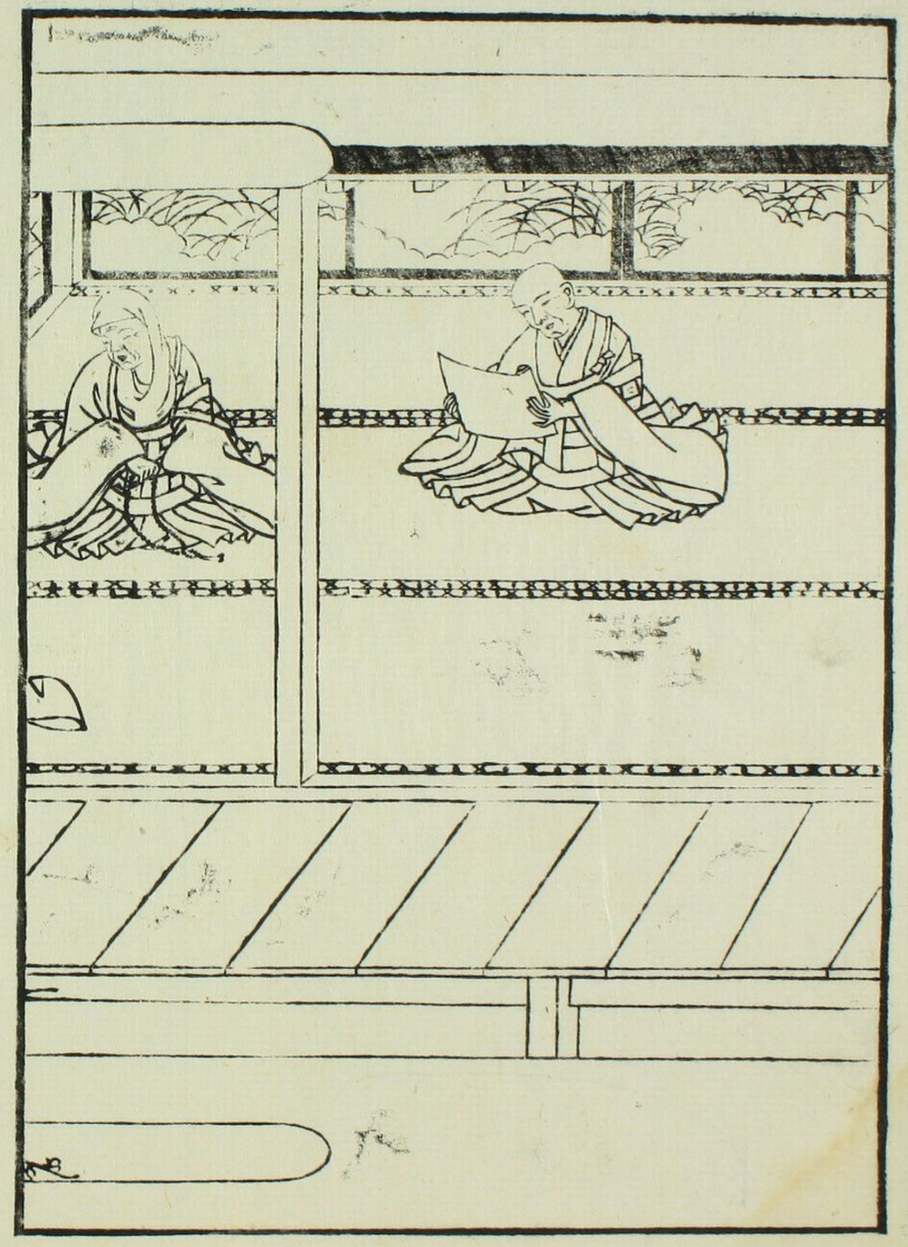
予是雖為祖師三世之孫生受御歸法之
跡三十余歳初而上京之處亦逢入滅之
後一生不拜息顔之思慕歟有余然今
奉謁面授真弟而遠聞聖人口訣之深
旨三代相承受法無所誤亦在世行狀
傳聞允詳也向後師弟銘骨之誓約永
以傳子孫備未代亀鏡者哉歡喜滿胸
感涙難止心中之誠偏仰祖師照覽頓
首頓首

建治二年丙子三月五日　　受法弟子如信在判

謹上

高田顕智上人御坊



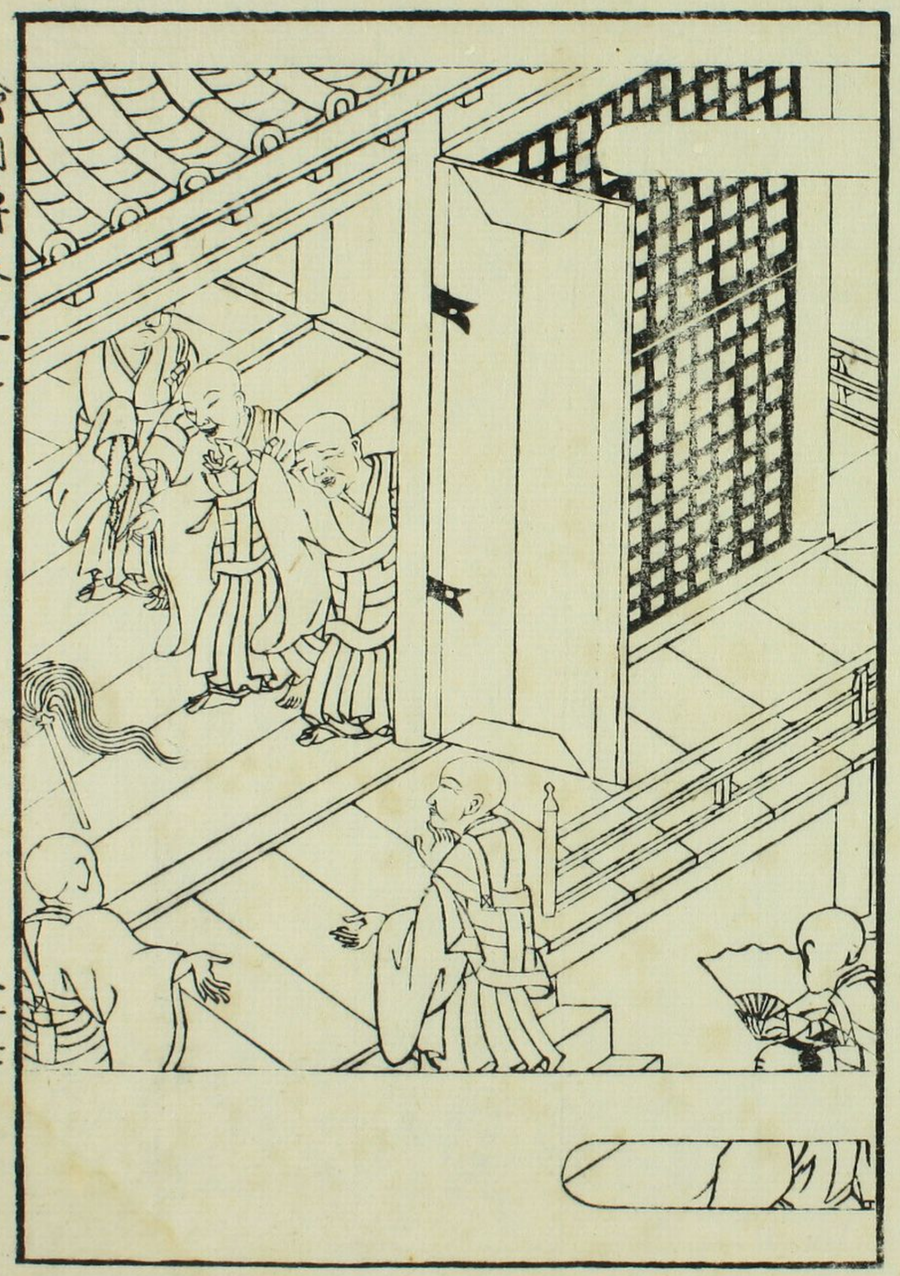


建治二年丁丑十一月祖師聖人の息女覚
信尼今師之給てゝ[illegible]ゝ親子のちぎりも
忘れがたく教化の師恩も深くぶべし御廟堂を
[illegible]ゝ御影堂へ[illegible]ゝ[illegible]
らんと願ひ望まれるゆゑに書しめ廟堂に尼公より授け給て願智
之人を高田ゆゑりたまひぬるの証文
ふ云
右代表地いもんちがうのかいとり師の房の
御ゆいとめんちゆゑ尼より[illegible]

ちづけ[illegible]たまひ[illegible]
ぐ[illegible]ふ[illegible]
とゝむ[illegible]
世[illegible]一筆かきをあらせ[illegible]
きんぢ之移ん十一月七日わまかくきん
きんらん之人いかの世でゝたちの中へ

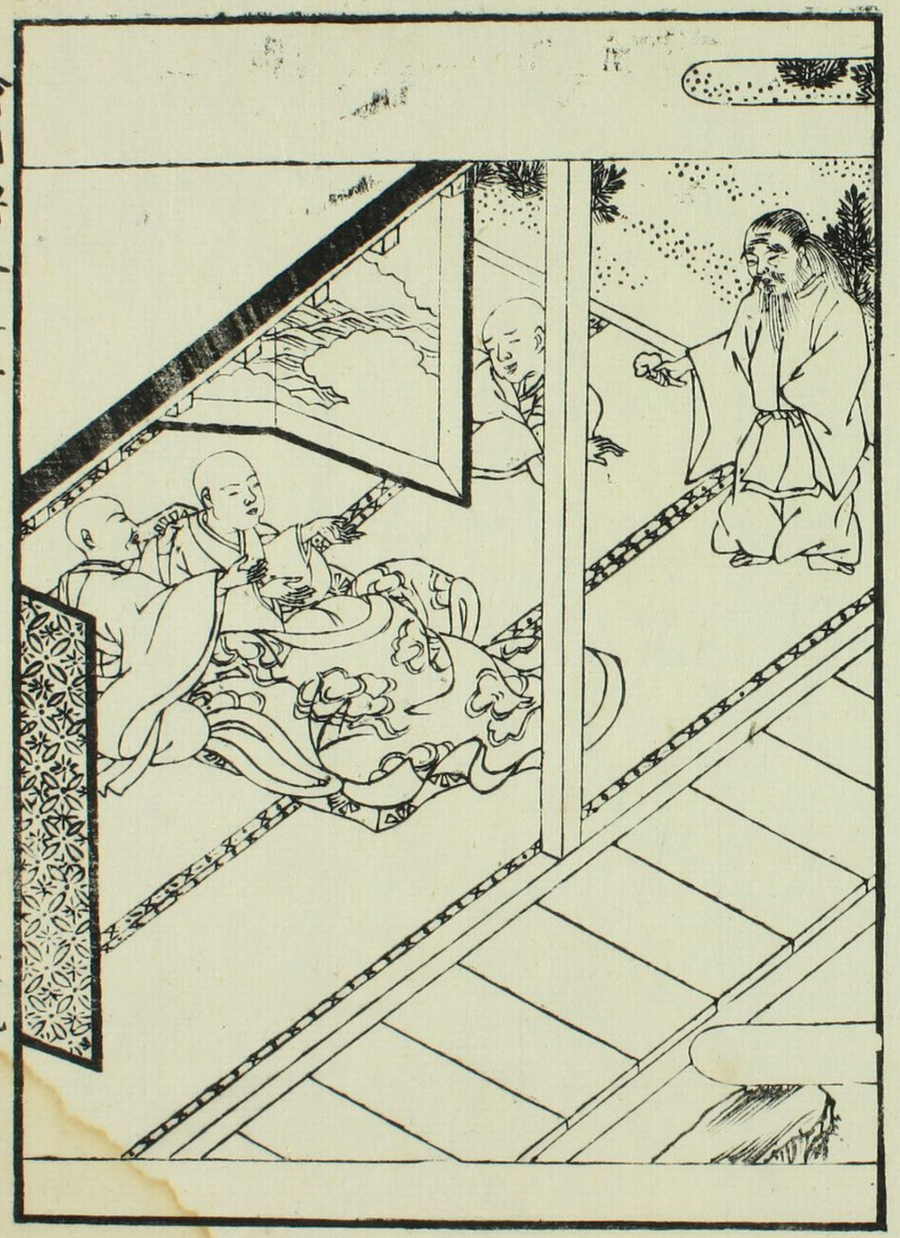
今師嘗て九十四代華園院の勅定に依て法
印大僧都に進ず両門弟帝師として天台宗聖
光院の門室に補せ六條有房卿傳宣せらる
其書今に有り
正慶三年七月四日辰時（正慶二年は建武元年なり）たゞ門徒
反集め番衆禁ぜ通経念仏し遺誡を委
曲に起て金堂に入り尋で金堂
と申けば忽に紙を引て掛る一枚
とのこゝの
同日午時伊勢國川曲郡に寂して説法

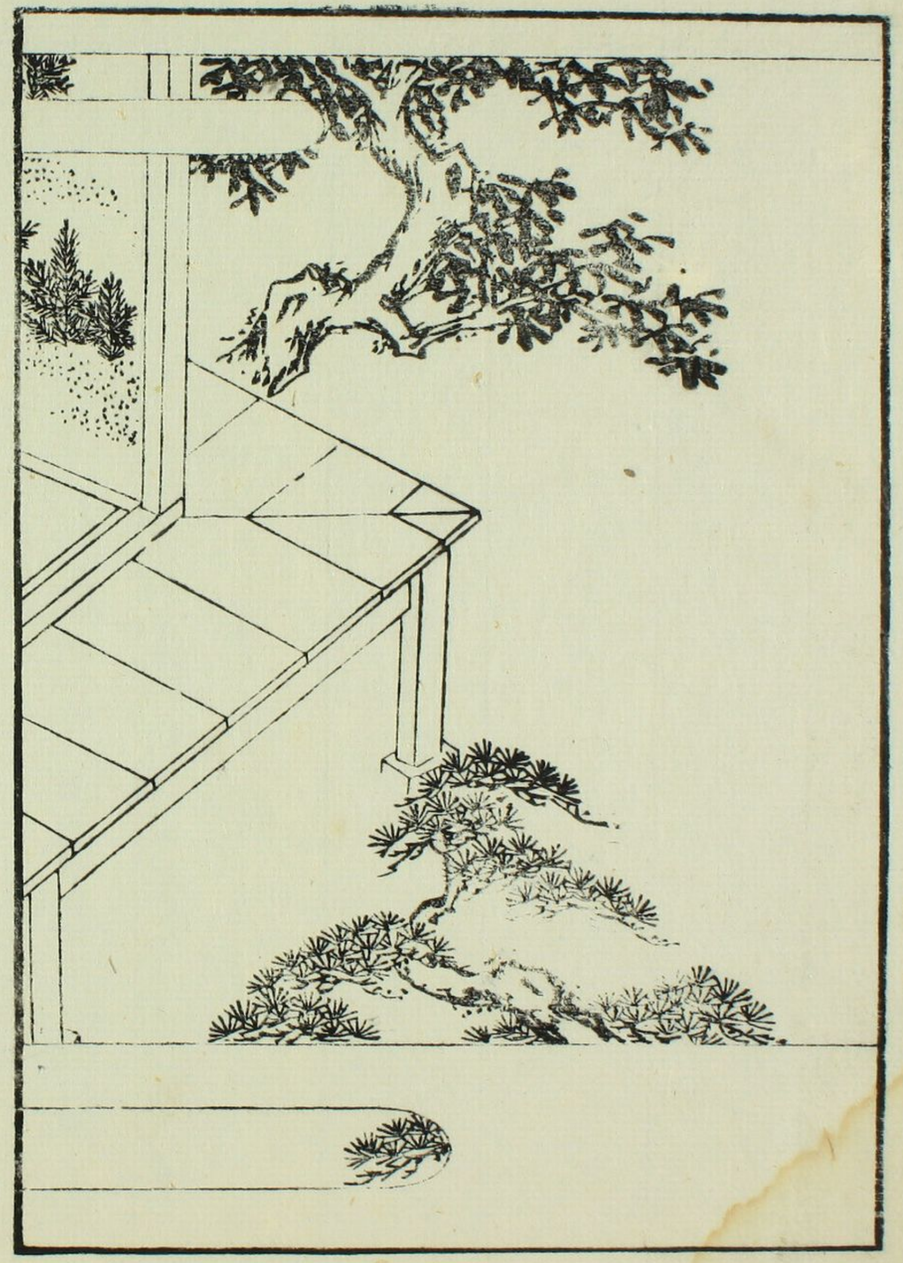
日没に到りてまゝ所在紙を引の故に七月
四日紙を引て滅日を定む又嘗て祖師一代の
撰述及び門人に行ぜしめ消息をも結集し
て高田山の寶庫に蔵めたまへり今時祖教
の天下に流布するは専この上人の力に
なり



第四祖專空上人は俗姓平氏筑守府將軍國香四の後胤下野國芳賀郡真岡の城主大門國行の三男なり俗名大内冠者行忠幼稚より聰明後智の人なり安貞二年戊子五月十一日高田に於て祖師の弟子となりたまふ時に十八歳なり祖師上洛の後眞門より先信光房信等に合せ而て小義化と施し立川の邪義を摧き人王に於て正法眞の弘法をうの上人より國なりと云ふ安二年己卯上人重病に加つて既に死し

一夕神くつまの神人來つて紫色の菌を與へくいたくられ百年の靈芝なりと是を食るに病を忘れ疾癒ぬ





正應二年己丑三月顯智上人より高田山の住持職と受け給ひ畏み奉て祖師の嚴命わすれ給はずてなり

同三年六月東山祖廟足まゝりの為に上京ありし又永仁四年丙申三月大谷の廟地分内なる せぐんぢを南隣なる青蓮院の門徒良海律師の園地と買求めて其境を知らくとこの時乃北域東西の面各十丈南の面十二丈北の面十丈七尺也其後正安四年壬寅二月覺如上人廟所の御堂の院文を捧らる其文に云

右當寺者顯智法師為報恩謝德令勸進親鸞聖人御門弟等以院宜并に書令俗造扁也亦者於後代末代雖為子孫令相傳官領輩不可違背彼義為後日證文如件

正安四年壬寅二月二十六日　覺如在判

阿弥陀寺專空御房に

應長元年上京し岡崎の御坊に逗留なる人々覺如上人に參詣ありまゝ云て祖師在世の事跡を問ふ其後正中二年乙丑四月法よのびつて善法院にいまん存覺まゝ來りて祖師一生の行狀を問ふ

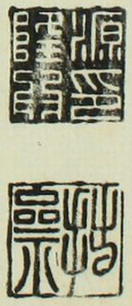
康永二年癸亥六月二日高田山の住持職と第二
の真弟定專大人より譲りをうけ同年十二月
十八日最初門弟の道俗に集め授法しをはり
本日中ふかく来刻より西方をむき合掌
低胸にいたり念佛数返し園林獄囚在百年
障指之間入寂法しを唱へて聲と共に入寂之
とまり年齢一百三十歳高田山の住職五十
年をへ世に真佛顕智專宣の二神と称
して祖師面授の三傑とし況るに真佛顕智
の両大人を持戒精嚴中にて弘願式宣揚し

專宣大人を師匠として念佛を弘
通しあつまれるの行狀名言物の宜しきを
随へたまふるの也口ばくに行迹ハこれ
をしるを傳法伝戒の面目展轉相承一義
の水と一義をうるぶおしく伝ぐ伝ずべし

親鸞聖人繪詞傳卷三終

一身田侍臣

河邊縫殿源隆為謹画



高田山御坊御藏版